

P_{ublication} M_{annual}

日本心理学会

執筆・投稿の手びき

(2022年版)

心理学研究

*Japanese Psychological
Research*

まえがき

公益社団法人日本心理学会は、学術誌として「心理学研究」と“*Japanese Psychological Research*”の2種類を発行しているが、本書はそれらの学術誌に論文を投稿しようとする人たちへの手びきとして作られたものの2022年改訂版である。

本書の内容は、両誌の各執筆規定に沿って論文を執筆する際、原稿作成に必要な基本的な心構え、原稿の提出要領、技術的諸事項などを解説するものである。なお“*Japanese Psychological Research*”については同じ内容の英語版も用意されている。

本書の構成は次のようになっている。

日本語版については、「第1章」で、論文を書くにあたっての心構えや注意点について述べている。「第2章」では、論文投稿から掲載までの一連の流れを解説する。「第3章」では「心理学研究」, 「第4章」では“*Japanese Psychological Research*”での投稿原稿の具体的な作成方法について詳細を解説している。また英語版は、第1章、第2章は日本語版と同じ内容であり、第3章に“*Japanese Psychological Research*”での投稿原稿の具体的な作成方法について詳細を解説している。

本2022年改訂版における主たる変更点は3点である。1点目は、この手びきの参考資料となっている American Psychological Association (APA) マニュアル (*Publication Manual of the American Psychological Association*, 7th ed., 2020: <https://apastyle.apa.org/products/publication-manual-7th-edition>) の改編に合わせて、必要箇所の変更を加えた点である。特に論文における各種の表記方法を改定した。2点目は研究倫理、ならびに利益相反の開示に関する問題への対応である。いずれも日本心理学会としての規定への対応が求められるため、日本心理学会倫理規程 (https://www.psych.or.jp/publication/rinri_kitei.html) ならびに関連規定、利益相反 (COI) に関する規則 (https://psych.or.jp/wp-content/uploads/2021/06/JA_JPA_Rules_on-Conflicts_of_Interest.pdf) ならびに関連するルール (<https://psych.or.jp/publication/conflict-of-interest>) を随時参照しながら、論文作成・投稿を進めていただきたい。

3点目は、「執筆・投稿の手びき」を日本語版と英語版の2言語で提供することとした点である。現在、“*Japanese Psychological Research*”には海外からの投稿も数多く寄せられていることや、留学生の増加への対応からも、日本心理学会としての基本的な考え方等についても英語での記載が必要と考えたためである。ぜひ両言語版を活用していただきたい。

近年、実証科学のさまざまな領域において、科学としての研究活動についての透明性を高め、よりよい活動にしていくことを目的としたオープンサイエンスの動きが急速に進められている。その中心は、プレレジストレーション、プレプリント開示、データ開示など、研究成果

の公開性を高める動きであり、それらは研究者集団として研究成果を公刊していく学術誌の在り方と深く関わっている。本学会においても、公正な研究活動の場を提供する組織として、あるべき姿を深く検討しつつ、現在こうした動きへの対応を検討しているところである。そうした変更については、随時、学会ホームページなどを通じて広報していく予定である。

目 次

まえがき	1
「心理学研究」と“ <i>Japanese Psychological Research</i> ”の沿革	8
第1章 論文を書くにあたって	9
1.1 論文の文章と用語	9
1.2 論文の構成	10
第2章 論文投稿から掲載まで	12
2.1 投稿資格	12
2.2 二重投稿, 剽窃の禁止	12
2.2.1 二重投稿	12
2.2.2 剽窃	12
2.3 研究データの取り扱い	14
2.4 投稿方法	14
2.5 投稿原稿のフォーマット	14
2.6 投稿のためのチェックリスト	14
2.7 投稿論文の受稿	14
2.8 デスク・リジェクション	15
2.9 査読	15
2.9.1 査読の手続き	15
2.9.2 査読の期間	15
2.9.3 論文の改稿	16
2.9.4 改稿論文の査読	16
2.9.5 採択, 不採択の決定	16
2.10 採 択	16
2.10.1 通知	16
2.10.2 最終稿提出	16
2.10.3 論文の著作権	16
2.10.4 校正, 刊行	19
2.10.5 必要経費	19
2.11 不採択	19
2.12 取下げ	19
2.13 再投稿	19

第3章 「心理学研究」の投稿原稿の作り方	22
3.1 「心理学研究」について	22
3.2 論文の種類、形式と長さ	22
3.2.1 論文の種類と定義	22
3.2.2 論文の形式	22
3.2.3 論文の長さ	22
3.3 論文情報	24
3.3.1 表題	24
3.3.2 著者名	24
3.3.3 所属機関名	24
3.3.4 「表題ページ」の脚注	24
3.4 本文	25
3.4.1 見出し	25
3.4.2 段落・見出し以外の序列	25
3.4.3 「本文中」の脚注	26
3.4.4 句読法	26
3.4.5 外国語	26
3.4.6 カタカナ略語	27
3.4.7 特殊文字	27
3.5 数字・数式、統計記号	27
3.5.1 数字	27
3.5.2 数式	28
3.5.3 統計記号、その他	28
3.6 単位	29
3.6.1 国際単位系	29
3.6.2 分量・倍量単位を表すための接頭語	29
3.6.3 単位記号の使用	29
3.6.4 SIに適しない例	30
3.7 引用・言及	30
3.7.1 文献の引用	30
3.7.2 文章の引用	31
3.7.3 図・表の引用	32
3.7.4 氏名・機関名への言及	32
3.8 表 (Table)	32
3.8.1 表の原稿	32
3.8.2 表作成上の一般的注意	32
3.8.3 表の番号、表の題	34
3.8.4 表の注	34

3.9 図 (Figure).....	34
3.9.1 図の原稿.....	34
3.9.2 図作成上の一般的注意.....	35
3.9.3 図の番号, 図の題.....	36
3.9.4 図の注.....	36
3.10 引用文献.....	38
3.10.1 文献を引用する場合の一般的注意.....	38
3.10.2 外国語文献の表記の仕方.....	38
3.10.3 日本語文献の表記の仕方.....	43
3.10.4 引用文献の記載順序.....	46
3.11 英文アブストラクトとキーワード.....	47
3.11.1 英文アブストラクト.....	47
3.11.2 キーワード.....	47
3.12 電子付録.....	47
第4章 “Japanese Psychological Research” の投稿原稿の作り方.....	49
4.1 “Japanese Psychological Research” について.....	49
4.2 論文の種類, 形式.....	49
4.2.1 論文の種類と定義.....	49
4.2.2 論文の形式.....	49
4.3 論文情報.....	50
4.3.1 表題.....	50
4.3.2 著者名.....	51
4.3.3 所属機関名.....	51
4.3.4 「表題ページ」の脚注.....	51
4.4 本文.....	52
4.4.1 見出し.....	52
4.4.2 段落・見出し以外の序列.....	52
4.4.3 「本文中」の脚注.....	52
4.4.4 句読法.....	53
4.4.5 英語以外の外国語.....	53
4.4.6 略語.....	53
4.4.7 特殊文字.....	53
4.5 数字・数式, 統計記号.....	54
4.5.1 数字.....	54
4.5.2 数式.....	54
4.5.3 統計記号, その他.....	54
4.6 単位.....	55

4.6.1	国際単位系	55
4.6.2	分量・倍量単位を表すための接頭語	55
4.6.3	単位記号の使用	55
4.6.4	SI に適しない例	56
4.7	引用・言及	56
4.7.1	文献の引用	56
4.7.2	文章の引用	57
4.7.3	図・表の引用	57
4.7.4	氏名・機関名への言及	58
4.8	表 (Table)	58
4.8.1	表の原稿	58
4.8.2	表作成上の一般的注意	58
4.8.3	表の番号, 表の題	59
4.8.4	表の注	59
4.9	図 (Figure)	59
4.9.1	図の原稿	59
4.9.2	図作成上の一般的注意	60
4.9.3	図の番号, 図の題	62
4.9.4	図の注	62
4.10	引用文献	62
4.10.1	文献を引用する場合の一般的注意	63
4.10.2	文献の表記の仕方	63
4.10.3	日本語文献の表記の仕方	67
4.10.4	引用文献の記載順序	68
4.11	アブストラクトとキーワード	68
4.11.1	アブストラクト	68
4.11.2	キーワード	68
4.12	Supporting Information	69
付 録		70
付録 1	単位記号	70
1	基本単位と補助単位	70
2	組立単位	70
3	心理学に関係ある SI 単位と併用単位	71
4	単位につける接頭語	73
5	不適切な単位の使用例とその正しい表し方	74
付録 2	「心理学研究」投稿のためのチェックリスト	75
付録 3	“ <i>Japanese Psychological Research</i> ” 投稿のためのチェックリスト	76

付録4 倫理チェックリスト.....	77
--------------------	----

あとがき.....	79
-----------	----

「心理学研究」と“*Japanese Psychological Research*”の沿革

「心理学研究」（英文名は“*Japanese Journal of Psychology*”）は公益社団法人日本心理学会が編集する日本語の機関誌で、心理学に関する論文を刊行する。「心理学研究」は旧日本心理学会会則第4条に基づいて、大正15年（1926年）4月に第1巻第1輯が刊行された。創刊より隔月に刊行し、年6冊をもって1巻とするのを原則としていた。なお、第10巻までは縦組で1巻は約900ページと決められていたが、第11巻（昭和11年）以降横組となり、1巻約700ページと編集規定に決められた。

昭和19年以降、数年間は不定期となり、第19—25巻までは年4冊をもって1巻としている。第26巻（昭和31年）以降、年6冊をもって1巻とする原則にもどった。刊行不定期時の巻輯・号の刊行年月は、第19巻1輯（昭和19年7月）、同2輯（昭和23年3月）、同3・4輯（昭和24年6月）、第20巻1号（昭和24年9月）、同2号（昭和25年3月）、同3号（昭和25年6月）、同4号（昭和25年12月）である。第21巻（昭和26年）以降は年1巻である。

現在「心理学研究」は1年1巻（4月—翌年3月）とし6号に分けて刊行され、論文の種類は「原著論文（Original Article）」、「研究資料（Methodological Advancement）」、「研究報告（Research Report）」、「展望論文（Review Article）」がある。

“*Japanese Psychological Research*”は公益社団法人日本心理学会が編集、刊行する英（欧）文の機関誌で、国内の原著論文を広く外国に知らせる目的で1954年3月に1号が刊行された。以後、4年間に不定期に5冊刊行されたが、1958年より年2冊刊行となり、1960年以降は年4冊となり、巻号制を採用することとなった。それにより不定期に刊行された1号より9号までがまとめられて第1巻とされ、1960年度刊行のものが第2巻となり、以後1年1巻4号の刊行が続けられている。なお、第1巻はA5変形判であったが、第2巻より、「心理学研究」と同じB5判となった。

現在“*Japanese Psychological Research*”は1年1巻（1月—12月）とし4号に分けて刊行され、論文の種類は“Original Article”、“Brief Report”、“Review”がある。

第1章 論文を書くにあたって

自分の考えや発見などを人に伝えるために最も適した論文形式は何か。はじめて科学論文（論文）を書くにあたって、いかに構想を立て、どのようにして内容を書き進めるか、その心構えや守らなければならない規則を本章で述べる。

1.1 論文の文章と用語

論文は、広範な読者が理解しやすいように、簡潔明瞭な文体で書く必要がある。原則として、日本語では常用漢字・現代かなづかいを用いて原稿を作成する。また英語については、ネイティブの専門家の責任ある校閲を経た文章であることが不可欠である。英語論文の書き方については、次のものを参照することが望まれる。

American Psychological Association. (2019). *Publication Manual of the American Psychological Association* (7th ed.). American Psychological Association.

論文中は、一般的でない用語の使用はできるだけ避ける。論文の文章のスタイルについて、とくに留意すべき点を以下にあげる。

(1) 順序よく意見を述べる

読者が理解しやすいように、用語や概念間の関連性に配慮し、論旨の展開に一貫性をもたせる。それには、句読点の付け方に注意し、誤解を招かないつなぎ言葉（接続詞や関係代名詞）を用いる。

(2) 滑らかな表現

論文は、明確で論理的な文章でなければならない。自分の文章は、論理の飛躍、推論の矛盾点、時制の間違い、同意語の不用意な使用などに気づかないことがあるので、時間をおいて読み直したり、他者に読んでもらったりすることが望ましい。

(3) 無駄のない表現

定義の明確な用語を用いて、必要な事柄のみを記述した短い文が望ましい。一部の人々にしか分からない特殊な用語は避ける。長文になる場合は、文章の構造に注意する。重複した表現は必要最小限にとどめ、内容のまとまりをもたせる。

(4) 箇条書き・体言止めの不使用

本文中に箇条書き、体言止めは用いない。

(5) 適切な言葉遣い

話し言葉は用いない。あいまいな表現、また、何を指し示すのか分かりにくい代名詞の使用は避け、略語を用いる際には、一般的なものを用いる。一般的な略語がない場合は、無理のない略語の使用を心がける。

(6) 日本語と外国語の混在の回避

日本語で論文を書く場合、すでに定着した翻訳語があるもの、また適切な日本語で表現できるものをわざわざ外国語で記載しない。たとえば、同一論文内で、あるときは“Dim 1”と書いたり、あるときは「次元1」と書いたり、「参加者の self-esteem の高低と…」などを書いたりするのは好ましくない。同じ論文の中に日本語と外国語を不統一に混在させないようにする。

(7) 正しい文法と語法

時制や記述方法に注意する。主語と述語の関係を明確にし、代名詞・関係代名詞・従属接続詞を正しく使用する。修辞語句の挿入の仕方に気を配り、差別用語や偏見と受け取られる言葉遣いを避ける。受動態と能動態を適切に使い分ける。

(8) 倫理的配慮

論文の作成にあたっては、「公益社団法人日本心理学会会員倫理綱領及び行動規範」の趣旨を踏まえ「公益社団法人日本心理学会倫理規程」〈https://psych.or.jp/publication/rinri_kitei/〉に則る。

1.2 論文の構成

論文の主な構成としては、問題（序論）、方法、結果、考察、結論の各部分を含むことが望ましい。

(1) 問題（Introduction）

その論文で何を問題にするかを簡潔明瞭に書く。ただし、本文冒頭に見出しは使用しない（たとえば、「問題（Introduction）」など）。先行研究に対する検討内容や仮説を含む。

(2) 方法（Method）

研究（実験、観察、調査、事例研究など）の対象、材料、方法、手続きなどについて、要点をもらさず詳細に書いておく必要がある。ただし、標準的方法あるいは同一方法を用いた既刊論文がある場合には、それを引用して記述を簡略にすることもできる。なお、実験参加者の個人情報の秘匿、保護など、研究倫理に関しても記述する。

(3) 結果（Result）

研究の結果を、内容の重要度に従って事実在即して忠実に述べる。自分の予期に反した事実も省略しない。

心理学における研究では統計的仮説検定が分析にしばしば用いられるが、仮説検定はデータ分析の一側面に限られる。必要に応じて仮説検定に限らず適切な分析手法を用いるのが望ましい。特に、仮説検定の適用にあたっては、前提とするデータの性質（データの分布の正規性や、標本相互の独立性など）が成立していることを確認する。

分析結果の記述においては、研究結果の重要性を評価できるよう効果量とその信頼区間も示す。元来の測定単位・尺度によって表された効果量は理解が容易であるが、必要に応じて尺度に依存しない標準化された効果量の指標（Cohen の d や標準化回帰係数等）

を示す。

データの欠測は分析の結果に大きな影響をしばしば与える。欠測を伴うデータを分析する場合には、欠測の頻度や件数を示すとともに、欠測の発生について経験的あるいは理論的な説明を記述する。分析において採用した欠測モデルの性質（MCAR, MAR, NMAR の区分）や、欠測に対応するために採用した方法（多重埋め合わせなど）について記述することが望ましい。

(4) 考察，結論（Discussion, Conclusion）

得られた結果を，従来の研究成果と比較し，その理論的意義を考察し，結論に至る過程を述べる。研究が複数に分かれている場合は，それぞれ方法，結果，考察を書いてもよい。ただし，その際は総合考察（General Discussion）が必要となる。

(5) 利益相反の開示

本文末に利益相反の開示について記述する必要がある。なお，投稿時は，著者情報が含まれる場合，著者情報を伏せて投稿する。詳細は「利益相反（COI）に関する規則」〈https://psych.or.jp/wp-content/uploads/2021/06/JA_JPA_Rules_on-Conflicts_of_Interest.pdf〉を参照されたい。

(6) その他

表題はもちろんのこと，引用文献（References），図表（Figure, Table），英文アブストラクトとキーワード（Abstract, Key Words）などが必要である。

第2章 論文投稿から掲載まで

公益社団法人日本心理学会が刊行する学術誌は「心理学研究」と“*Japanese Psychological Research*”の2種類である。これらの学術誌の編集は、機関誌等編集委員会（以下、編集委員会とする）の責任のもとに行われる。この章では、論文の投稿から掲載（刊行）に至るまでの過程を説明する（次ページの「投稿から掲載の流れ」も参照のこと）。

2.1 投稿資格

公益社団法人日本心理学会の学術誌は、原則として本学会会員の心理学に関する未公開の論文の発表にあてて。ただし、非会員からの投稿論文でも、本学会に寄与するものは掲載が認められる。その場合、心理学研究における掲載料は著者の負担とする（詳細は、2.10.5 必要経費を参照されたい）。

論文の掲載を希望する者は、所定の体裁を整えた論文（原稿）を作成、電子投稿システムから投稿し、編集委員会の査読を受けるものとする。

2.2 二重投稿、剽窃の禁止

2.2.1 二重投稿

両学術誌に掲載される論文は、すべて未発表のものであることが要求され、本学会では二重投稿を認めない立場をとっている（詳細は学会ホームページの、「二重投稿」に対する公益社団法人日本心理学会の方針を参照されたい〈<https://psych.or.jp/publication/duplicate-publication/>〉）。

二重投稿とは、同一の（または極めて類似した）内容の学術的著作物が同一の著者および連名者によって、複数回にわたり投稿されることを指し、代表的な例として、「ほぼ同一の内容の論文を複数の刊行物へ同時に投稿した場合」、「ほぼ同一の内容もしくは本来は一つであるべき内容を小さく分割して継続的に投稿した場合（いわゆるサラミ出版）」がある。

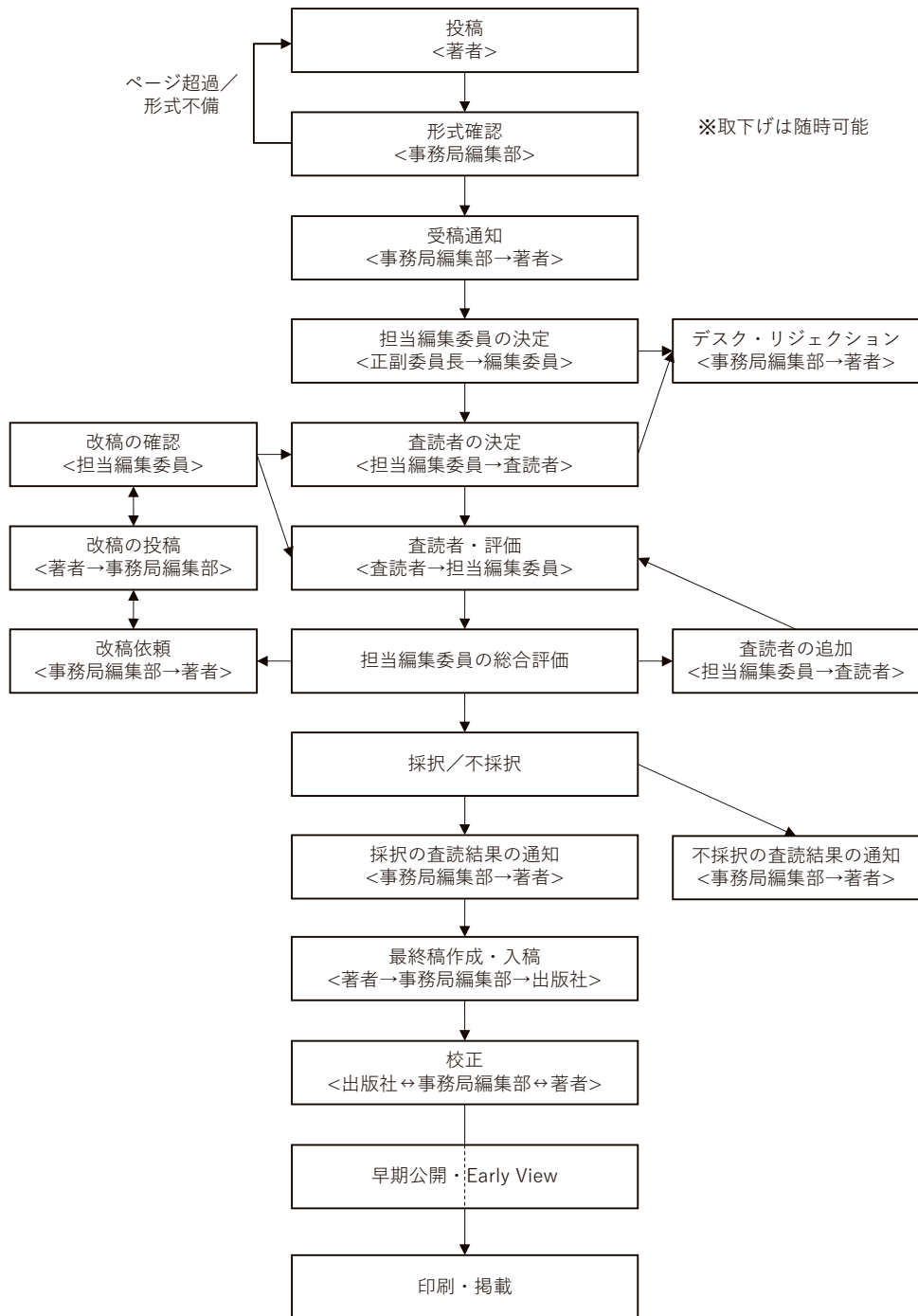
このような二重投稿が明らかになった場合は、当該論文は即時に却下される。二重投稿にあたるかどうかは編集委員会が判断する。

2.2.2 剽窃

研究業績や実験、データ、理論、仮説、アイデアなどを引用もしくは利用する場合には、そのことを本文で言及し、それらが記載されている論文や資料等の出典を明示する。出典を明示せずに引用・利用する行為は盗用（剽窃）とみなされる。

また著者自身の過去に発表した文章、データ等の一部またはすべてを、以前に発表した

投稿から掲載の流れ



ことを明示せずに再利用し、新しい業績であるかのように発表する行為も、不正行為となる自己剽窃とみなされる。

2.3 研究データの取り扱い

研究で得られたデータについては、紛失、漏洩、改ざんなどがあってはならず、それらを防ぐためにその取り扱いには細心の注意を払う必要がある。

また、査読の過程などで研究データの開示を求められた場合、迅速に対応できるように準備をしておく。

詳しくは、「日本心理学会倫理規程〈https://psych.or.jp/publication/rinri_kitei/〉」を参照されたい。

2.4 投稿方法

両学術誌への投稿は、電子投稿システムにより行う。以下の URL より電子投稿システムにログインする。

https://jpa.bunken.org/jpa/user_logins/jp/（「心理学研究」用）

<https://jpa.iap-jp.org/jpr/>（“*Japanese Psychological Research*” 用）

アカウントを所持していない場合は、ログインする前に新規アカウント発行（ユーザー登録）手続きを行う。またすでに登録済みと表示される場合は、事務局編集部にお問い合わせる。

2.5 投稿原稿のフォーマット

「心理学研究」および“*Japanese Psychological Research*” の原稿フォーマットは、以下からダウンロードできる。

- (1) 「心理学研究」の原稿フォーマット

(https://psych.or.jp/publication/temp_jjp/)

- (2) “*Japanese Psychological Research*” の原稿フォーマット

(https://psych.or.jp/publication/temp_jpr/)

2.6 投稿のためのチェックリスト

「執筆・投稿の手びき」の巻末に掲載した「投稿のためのチェックリスト」を参照の上、誤りのないことを確認して投稿する（付録2, p. 75, 付録3, p. 76）。

2.7 投稿論文の受稿

投稿論文は、まず事務局編集部において、この「執筆・投稿の手びき」に準拠しているか否かをチェックし、不備のない場合は受稿を著者に連絡する。形式を逸脱したものは受稿せず、それらの点について修正を求めるため、必ず形式を確認した上で投稿する。

2.8 デスク・リジェクション

受稿された投稿論文は、編集委員長または副編集委員長により、担当編集委員への依頼の前に、掲載の適切性について判断される。その際に、不適切だと判断された場合、通常の審査を経ずに掲載不可が決定（デスク・リジェクション）される。また、担当編集委員が査読者を選定する前にも、同様の判断が行われることがある。

デスク・リジェクションと判断される例としては、以下が挙げられる。ただし、以下の理由以外にも、査読に進む必要がないと判断された場合は、デスク・リジェクションと判断される。

- (1) 投稿先として、「心理学研究」もしくは“*Japanese Psychological Research*”が妥当でない。
- (2) 論文の体裁が、著しく「執筆・投稿の手びき」から逸脱している。
- (3) 論文の構成が、一般的な科学論文の形式に沿っていない。
- (4) 過去に不採択となった論文、取下げられた論文の再投稿において、その際に指摘された問題点が解消されていない。

2.9 査読

2.9.1 査読の手続き

- (1) 担当編集委員の決定と査読者の選定

編集委員の中から受稿論文の担当編集委員1名を決定する。担当編集委員は査読者2名を選定する。査読者は会員・非会員を問わない。

- (2) 査読者による査読

受稿論文は査読者2名に、著者情報を伏せて依頼され、査読される。査読者名は著者には公表されない。ただし、“*Japanese Psychological Research*”については、査読者が査読者名の公開・非公開を選択でき、担当編集委員名は著者に開示される。

- (3) 担当編集委員による判定

査読者による評価に基づき、担当編集委員の判定が行われる。

- i) 「このままで採択」
- ii) 「多少修正の必要あり」の場合には、修正・加筆が求められる。
- iii) 「大幅に修正・加筆後、再審査」の場合には、改稿が求められる。
- iv) 「照会后、再審査」の場合には、照会、問題点に対する回答が求められる。
- v) 「不採択」
- vi) 2名の査読者の評価が「不採択」とそれ以外に分かれた場合、第3の査読者が追加される場合がある。

2.9.2 査読の期間

受稿あるいは改稿受付から査読終了までに要する期間は、論文により多少の差はあるが、査読者、担当編集委員にはそれぞれ1回の査読を1ヵ月で終了するように依頼している。しかし、第3の査読者を追加するなど慎重を期することから時間がかかる場合があ

る。

2.9.3 論文の改稿

受稿論文は、担当編集委員、査読者のコメントを付けて、期限つきで改稿を求められることが一般的である。その際の注意事項を以下にあげる（見本 2.1, p. 17, 見本 2.2, p. 18）。

- (1) 査読者のコメントをできる限り尊重して改稿する。
- (2) 「著者からの回答」には、査読者のすべてのコメントに対して、原稿のどこをどのように改稿したか（あるいは改稿しなかったか）を明確に記述する。修正対照表はなくてもかまわないが、要求がある場合には、その限りではない。
- (3) 査読者のコメントが著者の立場と違っていると考えられる場合には、指摘された問題点に対して十分説得し得る資料・論拠を、「著者からの回答」か、本文中に追加する。
- (4) 改稿原稿、「著者からの回答」を整えたら、当該論文の改稿として、投稿時に準じて、電子投稿システムにアップロード（提出）する。電子投稿システムに入力する論文情報（表題、英文アブストラクト、脚注他）なども忘れずに修正する。
- (5) 改稿の形式に不備がある場合、事務局編集部から、それらの点についての修正を求めることがある。
- (6) 著しく改稿が遅れたとき（改稿依頼から6ヵ月経過したとき）には、取下げ扱いとすることもある。

2.9.4 改稿論文の査読

著者によって修正・加筆され再提出された改稿論文は、担当編集委員が確認し、再度の査読が開始される。論文によっては数次にわたり査読され、修正が求められる場合もある。

2.9.5 採択、不採択の決定

採択、不採択は、すべての査読者からの最終評価が得られた後、担当編集委員が採択、不採択を判定し、編集委員会で審議し最終的に決定する。

2.10 採 択

2.10.1 通知

編集委員会で採択が決定した論文は、著者にその旨が通知される。編集委員会で採択が決定した日を論文の受理日とし、その後の論文の訂正・加筆は原則としてできない。

採択論文の掲載は原則として受理日、受稿日、論文種類によって決定するが、編集上の都合で多少前後することもある。

2.10.2 最終稿提出

事務局編集部からの連絡に従い、著者は速やかに最終稿の電子データを提出する。図表のファイル形式に注意し、原稿の元となったファイル（なるべく高解像度のファイル：たとえば、Microsoft Excel, TIFF, JPG, PNG, BMP）もあわせて送る。

2.10.3 論文の著作権

掲載論文の著作権は、公益社団法人日本心理学会に帰属し、両学術誌に掲載された論文

見本 2.1 「心理学研究」論文修正上の注意点

論文修正上の注意

論文の修正は、再査読時にわかりやすいようにお願いいたします。査読コメントに対する回答を提出してください。また、修正対照表（修正前と修正後の部分に対応させた抜き書きの表）はなくてもかまいませんが、要求がある場合は作成してください。

1. 原稿の修正の仕方

査読の効率化と誤り防止のため、できるだけきれいな原稿をお送りください。原稿 PDF ファイルには、表題、英文アブストラクトとキーワード、本文、引用文献、「本文中」の脚注、図表、付録を含め、著者情報（著者名、所属機関名、連絡先、「表題ページ」の脚注（研究助成、謝辞など））は記載しないでください。

2. 「著者からの回答」（修正コメント）

査読者のすべてのコメントに対して、原稿のどこをどのように修正したか（あるいは修正しなかったか）を明確に記述してください。

査読者のコメントに賛成できない場合は、指摘された問題点に対して十分説得し得る論拠を述べてください。

著者からの回答（修正コメント）のファイルは、査読者ごとにわけるのはではなく、一つにまとめて提出してください。

3. 修正対照表について（要求があった場合）

原則として、修正部分の多少にかかわらず、すべての修正箇所を抜き書きしてください。ただし、論文全体に頻出する同一語句を修正する場合は、一回指摘していただければ結構です。

大幅に書き直した場合には、その修正方針、内容を査読者のコメントに対する著者の意見としてまとめてください。

修正対照表は、参考資料欄に提出してください。

4. その他

- ・本文修正に伴う引用文献の変更や図表番号の変更にもご注意ください。
- ・論文情報画面もあわせて修正してください。
（表題、英文アブストラクトとキーワード、脚注、倫理チェックリスト）
- ・著者情報画面の修正は、事務局編集部へご連絡ください（所属機関変更、改姓（名））。
- ・共著者の追加、変更、削除がある場合は、事務局編集部までご連絡ください。
- ・引用文献中の誌名は略さずに書いてください。

修正対照表

旧論文	訂正論文
p.2, l.7-11 この discrepancy と態度変化の間には、たとえば Bochner & Insko (1966) の研究のように、健康や快適さの上で一日に必要な睡眠時間として 0 時間がよいとする極端に discrepancy なメッセージ効果をも含めれば、曲線的関係が多く見いだされている。	削除 理由：論文の論理的体系化のためには、他の説明は補助的にとどめるべきだとの御指摘による訂正
p.2, l.16-p.3, l.11 そして説得的メッセージ研究の文脈で仮定……努力を随伴しがちになるからである。	p.4, l.5-16 Aronson (1961) は努力の度合が大きくなるほど…… 説得的メッセージ研究で得られた知見とも一致するものである。 （この部分は、表現の仕方をできるだけ論理的にするために組み直したもので、本質的には旧論文と変化はないと考えられる。よって簡略にしておいた。）

見本 2.2 “*Japanese Psychological Research*” 論文修正上の注意点**Revising your manuscript**

When revising your manuscript, it is important to ensure that the reviewers can easily identify the changes you have made to the manuscript. Also, when submitting the responses to reviewers' comments, please provide a table of corrections showing the sentences before and after the corrections, if requested by the reviewers. However, you are not required to provide a table of corrections if the reviewers have not requested it.

1. Revising the manuscript

To ensure that the editing process is efficient and to prevent errors, please make sure that your manuscript is as error free as possible. The PDF file of your manuscript should include the title, abstract, keywords, main text, references, footnotes, figures and tables, as well as the appendixes. Information about the authors such as the name, affiliation, correspondence address, research grants, and acknowledgments, among others, should not be included in the PDF file.

2. Responses to reviewers' comments

Please describe precisely the sections of the manuscript that were revised (or not revised) corresponding to the comments by each reviewer. When you do not agree with a reviewer's comment, please describe your reasons for the disagreement.

Please submit the responses to reviewers' comments by attaching it to the Response File.

3. The table of corrections (when requested)

*In principle, please include all the corrections that were made in the table, regardless of their length.

*When you have changed a word that appears repeatedly throughout the manuscript, it should be indicated in the table only once.

*When you have made a major revision, please indicate the reason and the content of your revision as a general opinion about the reviewers' comment.

*Please submit the table by attaching it to the Response File.

4. Other issues

*When you revise the main text, please make sure that corresponding changes are also made to the reference list and figure and table numbers.

*Please make sure that you have also revised the information about the manuscript, such as the title, abstract, keywords, footnotes, and the ethical checklist.

*Please contact our Editorial Office when you correct information about the authors, such as their affiliations, or names.

*Please use full journal titles in the reference list instead of abbreviations of the titles.

を許可なくして複製および転載することは、禁じられている。なお、著者はこれに関する同意書の提出を求められるが、著作権者人格権についてはその限りではない。

また、J-STAGEの電子付録に関する著作権は、クリエイティブコモンズライセンスを採用しており、各電子付録の記載に従う必要がある。

2.10.4 校正, 刊行

最終稿を出版社に入稿後、初校が著者の元に送られるまで、約2ヵ月かかる。著者校正は初校のみ行う。初校は、誤字・脱字の訂正に限り、最終稿以外の訂正・加筆は認められない。著者校正は、必ず読み合わせを行い、できる限り速やかに指定の方法で返送する。

再校校正は出版社が行い、印刷、刊行に進む（見本2.3, p. 20, 見本2.4, p. 21）。刊行までに時間がかかる場合には、オンラインで早期公開（Early View）を行っている。

2.10.5 必要経費

「心理学研究」では、会員が投稿した場合には、掲載料を必要としない。ただし、規定ページを超過したときは、超過ページ料（20,000円：2022年現在）を要する。

また、英文校閲その他の諸費用が編集手数料として、各論文一律10,000円請求される。第1著者が非会員の場合は、掲載時1ページあたり20,000円の非会員掲載料を要する。

“*Japanese Psychological Research*”の場合、編集手数料、非会員掲載料は必要としない。両誌共に、著者に対して抜刷20部を贈呈する。それ以上の抜刷は著者の負担とする（抜刷代は、1部300円である。初校著者校正返送時に抜刷の発注部数を申し込む）。

これらの経費は、掲載誌刊行後に請求される（金額はいずれも2022年現在）。

2.11 不採択

編集委員会で不採択が決定した論文は、著者に査読コメントと共にその旨が通知される。

2.12 取下げ

著者は、どの段階でも投稿論文を取下げることができる。その旨を事務局編集部へ申し出る。

2.13 再投稿

取下げ、不採択後に論文を改めて投稿する場合は、再投稿となる。査読は新規投稿と同様に行われるが、「編集委員会への連絡」欄に前稿の論文番号を記載し、「参考資料」欄に「著者からの回答」をアップロード（提出）する。

見本 2.3 「心理学研究」掲載見本

心理学研究 2020 年 第 91 巻 第 1 号 pp. 23-33

原著論文
Original Article指先が変える単語の意味
——スマートフォン使用と単語の感情価の関係——川上 直秋¹ 島根大学

The flick effect: Smartphone use with flick movements changes the meaning of words

Naoki Kawakami (Shimane University)

Drawing on the literature about approach-avoidance behavior, this study tested whether asymmetries in the ways people interact with their smartphones using flick input (an input method based on swiping a key in a certain direction to produce the desired letter) influence their evaluations of the emotional valence of words. Specifically, a downward flick is regarded as an approach behavior in that the movement of a finger is directed toward the self, while an upward flick is regarded as avoidance behavior in that the movement is directed away from the self. In five studies, the predicted relationship between emotional valence and direction of finger movement on the smartphone was observed for nonwords and existing words. On average, words with more downward flick letters were rated as more positive in valence than words with more upward flick letters (hereafter referred to as the Flick effect). Of note, the Flick effect was not found among people who have never owned a smartphone, suggesting that smartphone use with flick input shapes the meaning of words.

Key words: flick input, smartphone use, approach-avoidance behavior, word meaning.

The Japanese Journal of Psychology

2020, Vol. 91, No. 1, pp. 23-33

J-STAGE Advanced published date: March 10, 2020, <https://doi.org/10.4992/jjpsy.91.18060>

近年、スマートフォン（以下、スマホとする）が急速に普及している。スマホのバイオニアである iPhone が米国で発売されたのは 2007 年であるが、平成 30 年版情報通信白書によると、わずか 10 年の間に日本でのスマホの所有率は 75% を越え、パーソナルコンピューター（以下、PC とする）の所有率（73%）を上回った（総務省、2018）。特に、30 代以下の若年層においては、LINE や Twitter をはじめとした SNS の利用割合が多く、相手との文字コミュニケーションの主要ツールとして確立したものと考えられる。その意味でスマホの普及は我々のコミュニケーションのあり方を変えると同時に、スマホ依存という言葉に表されるようにライフスタイルすらも変えたと言っても過言ではない。スマホを 1 人 1 台持つことが当たり前とな

りつつある社会風潮の中で、本研究はスマホの長期的な使用が単語の感情価へ影響を及ぼす可能性を検討するものである。

単語の意味の変容

言葉は他者へ何かを伝え、また他者から情報を受け取るコミュニケーションの手段である。言葉の構成要素の中でも、単語はそれ自体が直接的に意味を有し、言葉を使ったコミュニケーションに不可欠な要素である。例えば、「私は幸せです」という文を誰かに発する（あるいはメールで送る）場合、それを受け取った人は、「幸せ」という単語の本来持つ意味から送り手の感情状態を推察することができる。「幸せ」というわずか 4 音節の単語が、ポジティブな感情価を有する単語として共有されており、互いにやり取りされるためである。

ところが、単語の意味は様々な状況的要因によって変わり得る。心理学的には、古くは Johnson, Thomson, & Frincke (1960) が Thorndike-Lorge count (Thorndike & Lorge, 1944) と呼ばれる単語の出現頻度を表す指標

Correspondence concerning this article should be sent to: Naoki Kawakami, Faculty of Human Sciences, Shimane University, Matsue 690-0823, Japan. (E-mail: naoki.kawakami@hmn.shimane-u.ac.jp)

¹ 本研究の実施にあたり、島根大学人間科学部の植田 航平さんにご協力いただきました。記して御礼申し上げます。

(川上 直秋 (2020). 指先が変える単語の意味——スマートフォン使用と単語の感情価の関係—— 心理学研究, 91(1), 23-33. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.91.18060> より、一部抜粋)

見本 2.4 “*Japanese Psychological Research*” 掲載見本

Japanese Psychological Research
2017, Volume 59, No. 2, 188–198
Special issue: Search Behavior

doi: 10.1111/jpr.12143

Brief Report

Effect of the Presence of a Mobile Phone during a Spatial Visual Search¹

MOTOHIRO ITO^{2, 3} *Chukyo University*
JUN-ICHIRO KAWAHARA* *Hokkaido University*

Abstract: Recent studies suggest that the “mere presence” of a mobile phone impairs social interactions and neuropsychological test performance. The present study examined whether the presence of a mobile phone causes spatial bias toward the device during a visual search task. Participants identified a target among spatially distributed non-targets. We manipulated three factors: device presence (mobile phone or notepad), target congruency (congruent or incongruent), and attentional load (set size 8 or 24). A mobile phone (or a notepad in the control condition) was placed on the left side of the computer screen. Participants also completed a questionnaire to measure Internet usage and attachment. Participants with high scores on the questionnaire rapidly identified the target at the congruent (same side as the phone) location, but the mere presence effect did not occur in this condition. In contrast, participants with low scores on the questionnaire demonstrated the mere presence effect, but no spatial bias was observed. These results suggest that the mere presence effect can be modulated by individual differences in the degree to which a device is appealing.

Key words: mobile phone, spatial bias, spatial attention, visual search, Internet use.

Mobile communication devices, such as smartphones and cell phones (hereafter, mobile phones) have replaced landlines and have become a widespread communication medium. Recent statistics indicate that approximately 120% of the total population in Japan holds a contract with a mobile telecommunication service, and the numbers have been increasing annually (Ministry of Internal Affairs and Communications, Japan,

2015). These devices provide various benefits by enabling instantaneous communication over long distances at any time and in any place. At the same time, however, researchers have suggested that mobile phones can have a negative influence on personal and interpersonal activities. For example, the convenience and usefulness of mobile phones can induce addictive overuse of the devices (Kwon et al., 2013; Roberts, Yaya, & Manolis, 2014), as

*Correspondence concerning this article should be sent to: Jun-Ichiro Kawahara, Department of Psychology, Hokkaido University, Kita-ku, Sapporo, Hokkaido 060-0810, Japan. (E-mail: jkawa@let.hokudai.ac.jp)

¹This research was supported by JSPS KAKENHI Grant-in-Aid for Scientific Research (26285168) to Jun-Ichiro Kawahara.

²The authors thank Yuri Kasugaya, Risa Tsujimoto, and Yuma Yasuda for assistance with data collection.

³Department of Psychology, Hokkaido University, Kita-ku, Sapporo, Hokkaido 060-0810, Japan.

(Ito, M., & Kawahara, J. (2017). Effect of the Presence of a Mobile Phone during a Spatial Visual Search. *Japanese Psychological Research*, 59(2), 188–198. <https://doi.org/10.1111/jpr.12143> より一部変更)

第3章 「心理学研究」の投稿原稿の作り方

本章では、「心理学研究」へ論文を投稿する際に、守らなくてはならない一般的な約束が述べられている。投稿論文（投稿原稿）を作成するために必要な事柄を、実際の電子投稿システムの入力画面とは異なるが、掲載される学術論文の形式にあわせて説明している。

3.1 「心理学研究」について

(1) 目的と範囲

「心理学研究」は、心理学のさまざまな領域に関わる科学研究を公表することを目的とする学術雑誌であり、原著論文、研究資料、研究報告、展望論文といった実証研究に基づく論文ならびにレビュー論文を公表する。

3.2 論文の種類、形式と長さ

3.2.1 論文の種類と定義

- (1) 原著論文 (Original Article)：原則として、問題提起と実験、調査、事例などに基づく研究成果、理論的考察と明確な結論をそなえた研究。掲載時 10 ページ以内。
- (2) 研究資料 (Methodological Advancement)：新たな実験装置や解析プログラムの開発、新たな心理測定尺度の作成やデータベースの構築など、研究の遂行に有用な新たな方法、技術およびデータに関する報告。掲載時 10 ページ以内。
- (3) 研究報告 (Research Report)：すでに公刊された研究成果に対する追加、吟味、新事実の発見、興味ある観察、少数の事例についての報告、速報性を重視した報告、萌芽的発想に立つ報告。掲載時 6 ページ以内。
- (4) 展望論文 (Review Article)：心理学の最近の重要テーマについて、研究状況、主要成果、問題点等を解説し、研究の意義と今後の課題を論じる。掲載時 20 ページ以内。

3.2.2 論文の形式

投稿原稿は A4 判の白紙を縦置きにして使用する。各ページは、上下、左右に 3 cm 以上の余白を取り、25 文字×32 行（800 字）とし、10.5 ポイント以上のサイズの文字を用いる（見本 3.1, p. 23）。原稿には通しページを付ける。

また、英文は、一般的フォント（見やすいもの）および 10.5 ポイント以上のサイズの文字を使用する。

3.2.3 論文の長さ

論文の長さは、表題、著者名、所属機関名、英文アブストラクトとキーワード、本文、引用文献、脚注、図表、付録などすべてを含め、論文種類ごとの規定ページ内におさめる

必要がある。論文の掲載時の長さは、以下のように見積もる。

- (1) 表題部分（表題、著者名、所属機関名、英文アブストラクトとキーワード、英文連絡先、「表題ページ」の脚注）は掲載時約半ページと見積もる（著者が5名以上の場合は2/3ページ）。
- (2) 本文は全角25文字×32行（800字）×3ページ（2,400文字）で掲載時1ページに相当する。
- (3) 引用文献は25文献で掲載時1ページに相当する。外国語文献の翻訳表記はプラス1文献で数える。
- (4) 表は横全角50文字×縦50行で掲載時1ページに相当し、25文字×50行で半ページに相当する。

見本 3.1 「心理学研究」本文原稿見本

2		
3	結 果	
4		
5	総 合 的 な 結 果	
6	マスク着用率 COVID-19 の流行や季節によって、マ	
7	スク着用習慣が変化したことを確認するために、各調査	Table 1
8	でのマスク着用率を算出した (Table 1)。その結果、	
9	COVID-19 の流行前後でマスク着用率は大きく異なっ	
10	ていた。夏季の調査では、COVID-19 流行前のマスク着用率	
11	は 8.59－8.81%と低いものの、流行後の夏季の調査では、	
12	76.51－79.00%と極めて高かった。冬季に実施した調査で	
13	も同様で、流行前は 19.45－30.00%であったが、流行後に	
14	は 50.75－82.34%とマスク着用率が大きく上昇した。つ	
15	まり、COVID-19 の流行で日本人のマスク着用習慣が大	
16	きく変化した。また、季節に応じたマスク着用率の変化	
17	は COVID-19 の流行前では確認できた (夏季では 8.59－	
18	8.81%，冬季では 19.45－30.00%)。しかし、COVID-19 の	
19	流行後は季節に関係なくマスク着用率は高かった。特に	
20	日本政府による第1回目の緊急事態宣言後の着用率は、	
21	夏季では 76.51－79.00%，冬季では 78.80－82.34%と、ど	
22	の季節でも高かった。なお、マスク着用頻度に関する質	
23	問項目の記述統計結果も Appendix A にまとめた。	
24	マスク着用頻度に関する質問項目の妥当性 調査参	
25	加時のマスク着用の有無を、マスク着用頻度に関する質	
26	問項目への回答で予測できるか確認したところ、どの調	
27	査でも、現在のマスク着用状態を、マスク着用頻度に関	
28	する質問で予測できた (Appendix B; $\chi^2s(5) > 64.30, ps$	

(宮崎 由樹・鎌谷 美希・河原 純一郎 (2021). 社交不安・特性不安・感染脆弱意識が衛生マスク着用頻度に及ぼす影響
心理学研究, 92(5), 339-349. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.92.20063> に一部変更して収載)

- (5) 図は図中の一番小さな文字が7ポイントの大きさになるよう縮小／拡大し、横 14 cm × 縦 21 cm で掲載時 1 ページに相当する。片段は 7 cm × 21 cm で半ページに相当する。

3.3 論文情報

3.3.1 表題

表題は、論文の内容に即したものとし、長さは、40 文字を超えないことが望ましい。副題は、できるだけ避ける。一連の研究の場合でも、番号の異なる同一表題は好ましくない。やむをえずそのようにする場合は副題としてそれをうけ、主題は別に付ける。副題の前後を、2 倍ダッシュ（——）ではさむ。表題は日本語とその英訳を併記する。

3.3.2 著者名

著者名は日本語とローマ字（英語、原語）表示を併記する。著者が改姓（名）をした場合は、括弧内に併記するのではなく、脚注として旧姓（名）を明示することが望ましい。

連名者は、その論文の内容に責任を持つ協力者に限られ（単なる補助者、部分的協力者は、連名者とはせず、必要があれば「表題ページ」の脚注において謝辞を述べる）、研究貢献度に従って順に並べることを原則とする。なお、これらは著者情報にあたるため、電子投稿システムにのみ入力し、原稿には含めない。

3.3.3 所属機関名

所属機関名は正式名称を、日本語と英語で表記し、すべての著者について記す。所属機関名は、部局などは掲載しない。たとえば大学の場合、大学名のみを掲載し、研究科・学部、学科、専攻などは必要があれば「表題ページ」の脚注として付記する。なお、これらは著者情報にあたるため、電子投稿システムにのみ入力し、原稿には含めない。

- (1) 著者の所属機関が、投稿時から変わった場合、あるいは研究を行った機関が、現所属機関とは異なる場合は、「表題ページ」の脚注にその旨を記す。
- (2) 非常勤の勤務先を所属機関として掲載する場合は、当該機関の承諾を必要とする。

3.3.4 「表題ページ」の脚注

「表題ページ」の脚注は、掲載時、表題ページの欄外に印刷される。脚注を付ける場合、該当箇所の右肩に上つき数字（^{1, 2, 3, 4...}）、通し番号で脚注番号を付ける。「表題ページ」の脚注で示す例をあげる。

- (1) 文部科学省、日本学術振興会などの科学研究費補助金などによる研究の発表である場合、大会で発表している場合、J-STAGE の電子付録機能を利用している場合など、研究についての補足は、表題（主題）に脚注番号を付ける。

¹本研究は、令和 3 年度日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究 B、課題番号 xxx、研究代表者 xxxx）の助成を受けた。

²本研究結果の一部は、日本心理学会第 85 回大会（2021）で発表された。

³本論文は第 1 著者が平成 29 年度に xxx 大学 xxx 研究科へ提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。

⁴分析結果の一部は、J-STAGE の電子付録に記載した。

- (2) 謝辞を述べたい場合、第1著者名に脚注番号を付ける。
- (3) 著者が改姓（名）をした場合や、所属機関については、該当の著者名に脚注番号を付ける。
- (4) 論文に関する連絡先は、掲載時の英文連絡先とし、共著の場合は、その論文に関して責任をもって対応できる者の、著者名、所属機関名、住所、メールアドレスを次の要領で示す。

Correspondence concerning this article should be sent to: 著者名, 部局, 所属機関名, 市区町村, 都道府県 郵便番号, 国名. (E-mail: メールアドレス)

Correspondence concerning this article should be sent to: Taro Shinri, Department of Psychology, Faculty of Letters, xxx University, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-xxxx, Japan. (E-mail: xxx@xxx)

3.4 本文

3.4.1 見出し（見本 3.1, p. 23）

本文での見出しは、以下の3種類のみ用いられる（一部を省略してもよい）。見出しはゴシック、ボールド体とし、番号は付けない。なお、本文冒頭には、見出しを記載しない。

- (1) 中央大見出し：行の中央におき、その上下はそれぞれ1行ずつあける。
- (2) 横大見出し：1行あけて左端から書き、本文は改行して始める。ただし、中央大見出しと横大見出しが連続する場合は、2行あけるのではなく、1行のみあける。
- (3) 横小見出し：行をあけず、左端から全角1文字あけて書き、本文は1文字あけて続ける。

3.4.2 段落・見出し以外の序列

内容のまとまりごとに段落をつける。段落ごとに改行し、左端から全角1文字分下げする。

- (1) 段落に序列をつける

関連性のある内容の段落に序列をつける場合は、算用数字で番号を付け、文章で簡潔に表現し、順次改行して用いる。コロン（:）やスペースを入れるなど、見出し扱いにはできない。

1. …
2. …
3. …

- (2) 段落内で序列をつける

文章中、または段落内で序列をつける場合には、(a) …, (b) …, (c) …, のようにアルファベットに括弧を付け、改行せずに文章を続けていく。コロン（:）やスペースを入れるなど、見出し扱いにはできず、(1), 1), ①, a) などは使用できない。

3.4.3 「本文中」の脚注

「本文中」の脚注は、論旨を進めていく上で参考になることや、本文中に入れると混乱を招くような事柄の補足的説明に用い、最小限にとどめる。

- (1) 掲載時、該当ページの欄外に印刷される。
- (2) 「表題ページ」の脚注から続く通し番号を、該当箇所の文末の右肩に上つき数字 (^{1, 2, 3...}) で付ける。見出しには付けない。
- (3) 脚注文は、原稿の引用文献の次のページにまとめて記す。
- (4) 著作権に関する注釈は、必要であれば「本文中」の脚注に記載する。
- (5) 抄録が公刊されていない場合、また書簡、私的な小集会での発表、発言、非公式の意見交換などは私信 (Personal communication, 年月) として扱い、引用文献ではなく「本文中」の脚注に記す。

3.4.4 句読法

- (1) 句点 (。)と読点 (,)

句点はマル (。), 読点はカンマ (,) を用いる。

- (2) 中黒 (黒丸) (・)

並列する同種の語を列挙する場合、あるいは外国語のカタカナ書きの場合などに、語と語の間に中黒を用いる。

- (3) ハイフン (-)

英語の対語・対句の連結、合成語に用いる。

- (4) ダッシュ (—)

 - i) ダッシュ (1 字分: —) は、期間や区間を示すのに用いる。波線 (～) は用いない。
 - ii) 2 倍ダッシュ (2 字分: ——) は、注釈的説明を挿入する際や日本語表題の副題に用いる。
 - iii) 2 分ダッシュ (半字分: -) は、日本語では対句、英語では期間、引用文献のページを表すのに用いる。

- (5) 引用符 (「 」, 『 』, “ ”, ‘ ’)

原則引用符は、日本語では「 」, 英語では“ ”を用いる。「 」, “ ”内に引用符を用いる場合は、『 』, ‘ ’を用いる。

- (6) 丸括弧 ()

原則として、() を使用する。

- (7) コロン (:)

例, 説明, 引用文などを導く場合、外国語文献の副題などに用いる。

- (8) セミコロン (;)

検定結果を列挙する場合、あるいは括弧内に引用文献を列挙する場合に用いる。

3.4.5 外国語

本文中における専門用語の外国語表記は、可能な限り避けるようにする。なお、次の場合には外国語を用いることができ、必要があれば、日本語訳の初出のときに外国語を括弧

内に書き添える。

- (1) 外国人氏名などの固有名詞
- (2) 引用文献, テスト名, 尺度名
- (3) 動植物のラテン語学名

3.4.6 カタカナ・略語

- (1) カタカナ

動植物の和名はカタカナで書く。また、一般に日本語化された外国語, 外国地名, 国名は用法に従ってカタカナで書く。

- (2) 略語

一般に用いられている略語以外はなるべく用いない。略語法について注意すべき点を次に列挙しておく。

- i) テスト名や長い専門用語の略語を用いるときは, 原典初出のときに, 「フルスペル表記 (以下, …とする)」, 「(フルスペル表記: 以下, …とする)」として略語を付ける。ただし, 略語が広く一般的に知られている語 (たとえば, fMRI) や, 統計用語 (たとえば, RMSEA) など, (以下, …とする) は不要である。
- ii) 略語には原則大文字を用いる。字間をあけたりピリオド (.) を付けたりする必要はない。特にピリオドを付けた形で用いることが慣習になっている場合には, 慣習どおりの形で用いる。

3.4.7 特殊文字

- (1) イタリック体

イタリック体を本文中で特定の語句を強調するために用いることはできない。なお, 次の場合にはイタリック体を用いることができる。

- i) 本文中に引用されている外国語書籍名, 外国語雑誌の名称と巻数
- ii) 英語で作成された図表の題
- iii) 統計法に用いられる記号 (例: M , SD , t , F , p , df , ns など)
- iv) 動植物のラテン語学名および特殊な専門用語

- (2) ボールド体

ボールド体の使用は, 原則として本文中の各見出しと, 表の因子構造を強調する数値に限られる。本文中で特定の語句を強調するために用いることはできない。

- (3) アンダーライン・傍点

原則として用いない。

3.5 数字・数式, 統計記号

3.5.1 数字

- (1) 算用数字

数を表示する場合は, 原則として算用数字を用いる。

- (2) 漢数字

漢字などと結合して名称を表す用語および概数を表す場合、純粹な数の概念から離れすぎたもの、物の名称になっているもの、慣習として特殊な語感を有するものには、漢数字を用いることができる（たとえば、一つ、一人、約百人…）。

(3) ローマ数字

原則として事例番号（たとえば、実験Ⅰ）、あるいは慣用表現（たとえば、Type II error）などの記述にのみ用いる。

3.5.2 数式

論文中の数式には、すべて通し番号を付ける。

- (1) 数学記号、量記号および変数の記号はイタリック体とし、なるべく JIS (Z8201, Z8202 参照) などで定められたものを使用する。
- (2) 単位、演算を表す記号はローマン体を使用する。
- (3) 分数式は原則として、 $\frac{(a+b)}{(c+d)}$ のように表し、本文中に入れるときは、 a/b , $(a+b)/(c+d)$ のように表す。
- (4) $\sin$, $\log$, $\exp$ などの記号は、ローマン体で表す。
- (5) 2つ以上の関連する数式を続けて上下に並べて書くときには、等号の位置でそろえる。

3.5.3 統計記号、その他

- (1) 統計概念の記号として用いる文字は、イタリック体とする。疑問な点は JIS などを参照する。原則として、分散分析表は含めない。 t (), F () などの書き方については、統計学辞典の凡例などを参照する。

検定結果については、 t , F , χ^2 などの検定統計量の値、自由度、 p 値、および効果量と効果の方向を記述する。なお、 p 値については正確な値を小数点以下 2 桁あるいは 3 桁で記述し、 p 値が .001 より小さいときは、 $p < .001$ と記述する。点推定値（標本平均や回帰係数など）を示す場合には、推定精度に関する情報（標準誤差など）をあわせて示す。論文中では一貫した有意水準によって信頼区間を表示することが望ましい。

資料に対して行った各種統計的検定の結果を文末で示すときには、文をカンマ (,) で区切り以下のように続ける。

$F(1, 10) = 6.18, p = .032, \text{est } \omega^2 = .07; F(4, 40) = 22.71, p < .001, MSe = 0.005$

$t(22) = 2.40, p = .013, d = 0.65, 95\% \text{CI} [0.35, 0.95]$

$\chi^2(4, N = 90) = 10.51, p = .033$

- (2) 百分率はすべて % の記号を用いる。
- (3) 特殊な記号、たとえば Hull の理論に用いられている SHR のようなものは、特に明記し、大文字、小文字、字体、上つき、下つきなどを明確にしておく。
- (4) 欠測を伴うデータを分析する場合には、欠測の頻度や件数を示すとともに、採用した欠測発生モデルと対応方法を記述する。
- (5) 統計的仮説検定も含めて推測統計の場合は、 p 値、効果量、信頼区間を記載する。

3.6 単位

計量単位は、原則として国際単位系（SI）を用いる。ただし SI 以外の単位も編集委員会で適当と認められた場合は使用できる。

3.6.1 国際単位系

基本単位と組立単位があり、それぞれ固有の名称と記号が与えられている。基本単位、組立単位ならびにそれらに併用できることを国際度量衡委員会が認めている単位のうち、心理学に関係あるものを付録1（pp. 70-74）に記す。

3.6.2 分量・倍量単位を表すための接頭語

基本単位、組立単位、併用単位のままでは大きすぎたり、小さすぎたりする場合、その10の整数倍（ 10^{-24} から 10^{24} までの分量・倍量）を表す接頭語を使用できる（付録1-4, Table 11, p. 73）。

3.6.3 単位記号の使用

- (1) 単位記号は、ローマン体を用い、一般に小文字で表すが、記号が固有名詞に由来する場合と、 10^6 以上の接頭語には大文字を用いる。本文中に、単位を文字で記す必要がある場合はカタカナを使用する。ただし、秒・分・時・日などの時間の単位、秒・分・度などの角度の単位、温度の度、ならびに立方、平方、回、については漢字を用いてもよい。
- (2) セルシウス度（摂氏） $^{\circ}\text{C}$ 、国際単位に併用できる単位である min（分）、h（時）、d（日）、 $^{\circ}$ （度）、'（分）、"（秒）、および L（リットル）は使用できる。
- (3) 単位記号には、複数形やピリオド（.）を付けない。たとえば min. のようにピリオド（.）は付けず、min とする。接頭語は1個のみを使用し、単位記号の前にそれと一体のものとして示す。ただし、基本単位の kg のみは kg でなく、g に1個の接頭語が付くように接頭語を選ぶ。たとえば、1 kkg ではなく、1 Mg とし、 $1\text{ }\mu\text{m}$ は m の前に2つの接頭語が付くので避け、1 nm とする。
- (4) 単位の前にくる数値が0.1 から1,000の範囲になるように接頭語を選ぶ。たとえば2,000 kg でなく2 Mg とし、0.00394 m でなく3.94 mm とする。ただし、同一の表や一連の文章の中でいくつかの数値を比較するときなどは、この範囲を超えても同一の接頭語を用いたほうがよい。
- (5) 組立単位に接頭語を付ける場合は、接頭語が先頭にだけ付くようにする。たとえば $1\text{ }\mu\text{m/ms}$ でなく 1 mm/s とする。
- (6) 組立単位が2個以上の単位の積として構成されている場合は、乗法の記号として、N・m のように点（中黒）をはさんで表すが、誤解の恐れがなければ N m のように点を省略してもよい。しかし、これを mN と表してはいけな。mN はミリニュートンでニュートン・メートルではない。m は、「ミリ」と「メートル」の両方を表すので特に注意する必要がある。
- (7) 組立単位が2個以上の単位の除算で構成されている場合は、m/s のように斜線、または、 $\text{m}\cdot\text{s}^{-1}$ のように負の指数のいずれで表してもよい。ただし、斜線を2個以上使用し

- てはいけない。たとえば、 $W/\text{sr}/\text{m}^2$ とはせず、 $W \cdot \text{sr}^{-1} \cdot \text{m}^{-2}$ または $W/(\text{sr} \cdot \text{m}^2)$ とする。
- (8) 量を表す数字と単位との間には 100 m のように半角の空白をおく。またやむをえず大きな数を表示しなければならない場合は 86,400 m のように 3 桁ごとにカンマ (,) で区切る。
- (9) dB (デシベル) は SI に含まれないが、使用することができる。

3.6.4 SI に適しない例

国際単位系では不適当とみなされる例と、その正しい表し方を付録に示す (付録 1-5, Table 12, p. 74)。

3.7 引用・言及

3.7.1 文献の引用

(1) 著者名・刊行年

本文中に文献を引用する場合、著者名 (姓) の直後に刊行年を添える。

i) 本文中に文章として入れる場合

「原田 (2020) によれば…」, 「Harada (2020) は…」

ii) 括弧内に文献を示す場合

「…という (中村, 2020)。」, 「…である (Nakamura, 2020)。」

iii) 同一著者で、同一年に刊行された文献がいくつかある場合、刊行年のあとにアルファベット小文字 a, b…を付して区別する。

「たとえば浅野 (2020a, 2020b) では…」, 「…とする (Asano, 2020a, 2020b)。」, 「井上他 (2020a, 2020b) が…」, 「(Kojima et al., 2020a, 2020b)。」

iv) 異なる著者で、同一姓、同一年の文献の引用があり、混同の恐れのある場合、日本語文献であれば第 1 著者の名を、外国語文献であればイニシャルを添える。

「山田 剛史 (2020) では…であり、山田 祐樹 (2020) では…となっている。」

「…といえる (山田 剛史, 2020; 山田 祐樹, 2020)。」

「本研究は、T. Yamada (2020) と Y. Yamada (2020) により…」

「…考えられる (H. Hayashi, 2020; Y. Hayashi, 2020)。」

(2) 自著の引用

著者自身の既刊文献の引用は、「著者は…」などとせず、「上瀬 (2020) は…」のようにする。

(3) 共著 (著者 2 名)

著者が 2 名の共著の場合は、引用のたびごとに両著者名を書く。

i) 日本語文献では、著者名の間は中黒 (・) で結ぶ。

「池田・深谷 (2020) は…」, 「…している (池田・深谷, 2020)。」

ii) 英語文献では、“&” を用いる。

「Itakura & Ito (2020) によれば…」

「…確認された (Itakura & Ito, 2020)。」

(4) 共著（著者が3名以上）

- i) 著者が3名以上の共著の場合、初出の際から、第1著者名以外は「他」，“et al.”と略記する。

日本語文献「井上他（2020）が…」，「…になる（井上他，2020）。」

英語文献「Kojima et al.（2020）を用いて…」

「…だろう（Kojima et al., 2020）。」

- ii) 複数著者の論文を「他」，“et al.”表記にした結果、同じ省略表記のものが複数できてしまう場合は、論文間の区別がつくまで著者名を書く。

日本語文献「井上・大江・川上他（2020）では…」

「…とする（井上・大江・齋藤他，2000）。」

英語文献「Kojima, Komura, Sawamiya et al.（2020）では…」

「とされる（Kojima, Komura, Sugiura et al., 2020）」

- iii) 省略表記をした結果、最後の著者だけが異なる場合は、「他」，“et al.”とせず、最後の著者まで書く。

日本語文献「井上・大江・川上・岸本・国里（2020）によると…」

「…とする（井上・大江・川上・岸本・小島，2020）。」

英語文献「Kojima, Komura, Sawamiya, Sugiura, & Suzuki（2020）では…」

「となっている（Kojima, Komura, Sawamiya, Sugiura, & Souma, 2020）」

(5) 翻訳書の引用

翻訳書を引用する場合は、原著者名とその刊行年を最初に引用し、そのあとに翻訳書の翻訳者名とその刊行年を括弧に入れる。

- i) 本文中に文章として入れる場合「Takeda（2019 田中・東山訳 2020）では…」とし、「Takeda（2019）」あるいは「Takeda（2020）」とはしない。
- ii) 括弧内に文献を示す場合「…試みた（Takeda, 2019 田中・東山訳 2020）。」

(6) 文献引用の順序

本文中の同一箇所でも複数の文献を引用するときには、文末の同じ括弧内に著者名のアルファベット順にセミコロン（;）で区切り、また同一著者については単著を優先し、刊行年順に並べてそれらをカンマ（,）で区切り示す。

「…となる（中道他，2020; 外山，2019; Toyama & Nagai, 2017）。」

3.7.2 文章の引用

- (1) 文献の記述の一部を直接引用するときには、原文（翻訳文）のとおり正確に転記する。
- (2) 引用文は別行とせず本文に続け、引用符（「」，“”）で囲む。
- (3) 引用文中にさらに引用句があるときには、内側に『』，‘ ’を用いる。
- (4) 引用文には、末尾に著者名、刊行年、掲載ページを書き添える。

「…示された（西山，2018, pp. 150-152）。」

- (5) 原典が入手困難なために翻訳書による場合は、翻訳書の引用のしかたに従い、掲載ページを明記する。

「…がある (Hashimoto, 2017 一言・藤・堀内訳 2020, p. 30)。」

(6) 文章を引用する際には、著作権者の許可が必要な場合があるので注意する。

(7) 原文の一部を省略した場合には、「…」で示す。

3.7.3 図・表の引用

(1) 図や表について本文で言及するときは、Figure 1, Table 1 のように表記し、「下図」, 「次表」などの表現は用いない。

(2) 他の文献の図や表を引用する場合は、その旨が明確になるように出典（著者名、刊行年、掲載ページ、原典の図・表の番号）を括弧内に書き添える。

「Figure 1. 概念構造のモデル (麦谷・森尾, 2013, p. 120, Figure 3)。」

(3) 図・表の引用にあたっては、著作権者の許可が必要な場合があるので注意する。

3.7.4 氏名・機関名への言及

(1) 本文中で氏名に言及するときは、初出の際には略さずに氏名を明記し、2 度目以後は姓のみを記す。外国人の場合は、ファースト・ネーム、ミドル・ネームはイニシャルでよい。ただし、引用文献の表記は前出 (3.7.1 p. 30) の方法による。

(2) 氏名には、謝辞の場合を除き、敬称や肩書きを付けない。

(3) 本文中で言及した氏名に所属機関名を書き添える必要があるときは、初出の際に氏名のあとに括弧に入れて示す。

(4) 本文中で研究機関名に言及するときは、初出の際は略さず正式名称を明記する。2 度目以後は省略表記してもよい。

3.8 表 (Table) (見本 3.2, 3.3, p. 33)

3.8.1 表の原稿

(1) 表の用紙

表は 1 ページに 1 つの表を書き、引用文献（「本文中」の脚注）のあとに図とは分けて、Table 1 から順におく。

(2) 表の大きさ

表の 1 行の文字数（横）は、日本語（全角）で 25 文字（半角の数字またはアルファベットの小文字で 50 文字）以内であれば、掲載時半ページ幅となる。全角 50 文字以内であれば、全幅とする。ただし、表におけるカタカナ、アルファベットの大文字、余白は全角扱いとなる。なお表の行数（縦）は、表の題、表の注、余白も含め 50 行が 1 ページに相当する。

3.8.2 表作成上の一般的注意

(1) 表の作成にあたっては、研究結果を最も効果的に伝えることができるように工夫する。表と図の内容の重複を避けると同時に、必要な情報は漏れなく記載されていなければならない。本誌に掲載している見本は一例であり、以下の文献にさまざまな種類の見本が掲載されている。

American Psychological Association. (2020). *Publication manual of the American Psychological*

見本 3.2 Table 見本

Table 1
恨み忌避感尺度における因子分析結果

恨み忌避感項目	因子負荷量		
	1	2	3
因子1：恨み不安			
5. 人から恨まれると、幸せになれないような気がする	.853	-.111	-.092
1. 人に恨まれると、自分の人生がうまくいかなくなるように感じる	.770	.007	-.072
12. 人から恨まれると、ろくな人生を歩めないと思う	.675	-.088	.058
4. 他の人が自分を憎んでいようとどうでもいい	-.586	.001	-.105
7. 人から恨まれることに恐怖を感じる	.469	.313	.125
3. 相手を怒らせるようなことをしてしまった場合、憎まれたり恨まれたりするのではないかと不安になる	.414	.201	.227
因子2：恨み被害忌避			
13. 人から恨まれたくない	.123	.703	-.097
10. 人から恨まれて危害を加えられるのがこわい	.128	.634	-.026
15. 人から恨まれて報復されるのがこわい	.127	.628	-.042
11. 人の恨みをかうような言動および行為はできるだけ避けたい	-.177	.617	.252
6. 人から恨まれて、家族や恋人を傷つけられることだけは避けたい	-.126	.611	-.122
8. 厄介なめにあわないように、人とうまく付き合いたい	-.104	.566	.159
14. 他者の言動や行為に対して根にもつような相手とは関わりたくない	.017	.412	-.100
因子3：言動抑制			
16. 自分が何気なく言った一言が相手を怒らせるのではないかと不安になる	.062	-.086	.764
17. 自分の言動や行動によって相手を怒らせてしまったらと思うと気が気でない	.155	-.124	.724
9. 人の恨みをかうくらいなら、自分は何も言わない方がいい	.057	.014	.510
2. 言えば人が傷つくことがわかっているようなことは、思っけても決して言わない	-.092	.084	.388

(北村 英哉・下田 麻衣 (2020). 恨み忌避感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討——拒否不安、調和性、信頼感との関連—— 心理学研究, 91(1), 59, Table 1. <https://doi.org/10.4992/jipsy.91.19204> より一部変更)

見本 3.3 Table 見本

Table 1
Descriptive Statistics and correlations

Variable	M	SD	1	2	3	4	5	6	7	8
1 Autonomy support	20.910	3.653	—							
2 Relatedness support	20.439	3.825	.821**	—						
3 Autonomy satisfaction	14.554	3.000	.319**	.320**	—					
4 Relatedness satisfaction	15.122	2.862	.470**	.582**	.538**	—				
5 Promotion focus	39.162	6.918	.280**	.286**	.391**	.281**	—			
6 Prevention focus	35.365	8.427	-.002	-.025	-.193**	-.161*	.077	—		
7 Relationship evaluation	17.068	3.309	.421**	.464**	.323**	.463**	.385**	.064	—	
8 Satisfaction with life	21.627	6.380	.272**	.327**	.639**	.432**	.308**	-.225**	.252**	—

** $p < .01$, * $p < .05$

(三和 秀平・外山 美樹・肖 雨知・長峯 聖人・湯 立・海沼 亮・相川 充 (2021). 制御焦点は基本的心理欲求とウェルビーイングの関連を調整するか 心理学研究, 91(6), 411, Table 1. <https://doi.org/10.4992/jipsy.91.19327> より一部変更)

Association (7th ed.). American Psychological Association. pp. 210–224.

(2) 表の言語

- i) 表は、英文アブストラクトと図表によって論文の要旨が明らかとなるよう、原則として英語とすることが望ましい。なお、表と図の言語は、論文内で英語か日本語どちらかに統一する。表の題を英語とし、表の注や表中の文字、あるいは図を日本語とするなど、英語と日本語を混在させない。
 - ii) 英語で統一する場合で、日本語表記を添える必要があるときは、括弧内に日本語を併記する。
- (3) 原則、表の見出しと表の左の項目（スタブ列）は左そろえとし、数値は中央そろえとする。表中の主要な英単語の頭文字は大文字にする。
 - (4) 数値は、有効数字を考慮して表記する。また、数字は小数点の位置、小数点以下の桁数をそろえることが望ましい。
 - (5) 数値の単位は、数字が縦に並ぶときはその数値に関する見出しの下、横に並ぶときは項目の右に書き入れる。
 - (6) 表中の数字が理論的に必ず1以下の場合（たとえば、相関係数）は、0を付けずに.52のように小数点以下のみを書く。
 - (7) 因子の構造を強調する数値は、ボールド体を用いることができる（見本 3.2, p. 33）。
 - (8) 表中の線はできるだけ少なくし、適当にスペースをとる。縦の罫線、斜線は用いない。
 - (9) 表について本文で言及し、挿入希望位置を本文の中に指定する。

3.8.3 表の番号、表の題

- (1) 表の番号は、論文中に示す順序に従って Table 1, Table 2 のように算用数字で通し番号を付ける。改行して表の題を付け、末尾にはピリオド（.）、句点（。）を付けず、表の上部に左そろえて表記する。
- (2) 表の題は、できるだけ簡潔にする。また表の題に用いる用語は本文と一致させる。

3.8.4 表の注

表の注は、表の題の下ではなく、表の下に以下の順におき、注の符号のあとに簡潔に記す。説明文の終わりにはピリオド（.）、句点（。）を付ける。

- (1) 表全体に関する補足的説明は、表中に注の符号は付けず、“Note.”、「注）」を表の下におき、説明文を添える。
- (2) 表中の特定部分に関する注は、表中の該当箇所の右肩に上つきで注の符号（^{a, b, c...}）を付け、複数ある場合は、原則改行せずに続ける。
- (3) “*” や “**” などの符号は、5 %、1 % の統計上の有意水準を示すときに用い、数値の右肩に示し、表の下部にその旨を示す。複数ある場合は改行せずに続ける。

3.9 図 (Figure) (見本 3.4—3.7, p. 37)

3.9.1 図の原稿

図は多くの情報を直感的に理解しやすい形で示すことができるが、かなりのスペースを

要するため、厳選し、必要な図のみを、効果的に使用することが望まれる。他の図や表の内容と重複しないよう注意する。

(1) 図の用紙

表と同じく、1 ページに1つの図を描き、引用文献（「本文中」の脚注）のあとに表とは分けて、Figure 1 から順におく。

(2) 図の種類

図にはグラフ、画像、チャートなどがある。必要に応じて折れ線グラフ、棒グラフ、散布図など適切な形式を選択する。折れ線グラフは、連続的に変化する独立変数（横軸）に対応する従属変数（縦軸）の変化を示すなどの場合に利用されるのが原則である。棒グラフは、一般に独立変数が名義尺度（カテゴリー群）である場合などに利用される。散布図は、変数間の関係を示すために利用される。

(3) 図の大きさ

図の中の一番小さな文字が7ポイントの大きさになるよう縮小／拡大した横幅が、7 cm 以内であれば、掲載時半ページ幅となる。14 cm 以内であれば、全幅とする。なお、図の縦は、図の題、図の注、余白も含め 21 cm が1 ページに相当する。縮尺率を考慮して、作成された図を事前に確認して投稿する。

3.9.2 図作成上の一般的注意

(1) 作図

作図は、縮尺を考慮して線の太さを決め、コントラストに留意する。なお、図の作成にあたっては色を使用しない。図作成ソフトを使用して作図する場合、大外の枠、背景色の存在、不要な線の存在など、「心理学研究」の図の作成上の注意と異なる点が多いため、注意を要する。

(2) 図の言語

- i) 図は、英文アブストラクトと図表によって論文の要旨が明らかとなるよう、原則として英語とすることが望ましい。なお、図と表の言語は、論文内で英語か日本語どちらかに統一する。図の題を英語とし、図の注や図中の文字、あるいは表を日本語とするなど、英語と日本語を混在させない。
- ii) 英語で統一する場合で、日本語表記を添える必要があるときは、括弧内に日本語を併記する。

(3) 線と点

- i) 縦軸の途中を省略する場合は、軸に波形、または斜線を入れて切り取ったことを示すとよい。
- ii) 座標軸や曲線、折れ線の太さは、論文を通じて一定にする。座標軸の太さはその図中の一番太い曲線、折れ線と同程度にする。
- iii) 同一論文に比較対照すべき複数の図があるときは、全部に同じ目盛りを用いる。
- iv) 折れ線のシンボルは縮小すると判別しにくくなることがあるので、大きめに描く。
- v) データの散布度を示すためにエラーバーを用いる場合には、それが標準偏差、標準誤

差、信頼区間などのどれを表すのかを明記する。

(4) 図中の文字

- i) 図中の文字は縮尺を考慮して大きさと太さを決める。図中の英単語の頭文字は大文字とする。ただし、単位はSI（付録1, pp. 70-74）に従い、大文字か小文字かを決める。
- ii) 座標軸の説明とその単位は各軸の外側中央に示す。縦軸は、日本語の場合は縦書きとし、英語の場合は下から上に向かって横書きで書く。

(5) 図について本文で言及し、挿入希望位置を本文の中に指定する。

(6) パス解析や構造方程式モデル（SEM）の結果をパス図で表示する場合には、標準的な表記を行う。以下の文献を参照されたい。

American Psychological Association. (2020). *Publication manual of the American Psychological Association* (7th ed.). American Psychological Association. p.239, Figure 7.7, p.240, Figure 7.8, 7.9.

(7) 写真は図とみなして扱う。写真の番号は図の通し番号に含める。

3.9.3 図の番号、図の題

- (1) 図の番号は、論文中に示す順序に従って Figure 1, Figure 2 のように算用数字で通し番号を付ける。改行して図の題を示す。
- (2) 図の上に、図の番号および図の題を左そろえて記す。
- (3) 図の題は、できるだけ簡潔にする。また図の題に用いる用語は本文と一致させる。

3.9.4 図の注

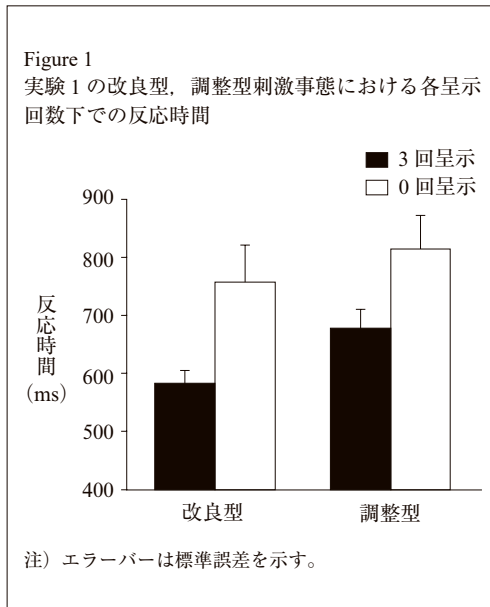
図の注は、図の下に以下の順におき、注の符号のあとに簡潔に記す。説明文の終わりにはピリオド（.）、句点（。）を付ける。

- (1) 図全体に関する補足的説明は、図中に注の符号は付けず、“Note.”、「注」）を図の下におき説明文を添える。
- (2) 図中の特定部分に関する注は、図中の該当箇所の右肩に上つきで注の符号（^{a, b, c...}）を付ける。図全体に関する注がある場合は、その下に改行して記す。複数ある場合は改行

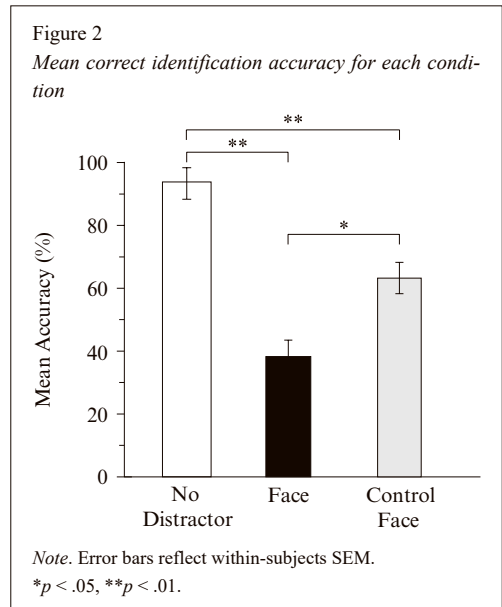
〈作図の際の留意事項〉

1. 必要不可欠なものを厳選する。
2. 他の表や図と内容が重複しないように注意する。
3. 必要十分な内容が記載されている必要がある。代表値に対する散布度、標本数などが重要な意味を持つ場合には、それらを図示する工夫が必要である。
4. 類似した内容の図の形式は、原則として統一する。
5. 図の題は、簡潔でかつその内容を十分に表し得るものであることが望まれる。同時にまた、他の図と異なる内容であることが容易に理解できるものでなければならない。
6. 図中の数値、その他の記号の意味は、本文を読まなくても理解できるように図中で説明されている必要がある。
7. 背景色は白にする。折れ線グラフのシンボルや棒グラフの塗りつぶしは明瞭に識別できるものを用いる。無意味な装飾（3D化、影など）を使用しない。

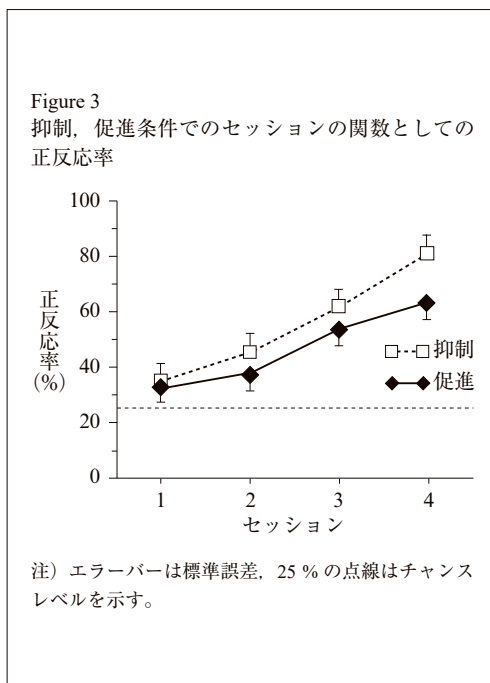
見本 3.4 Figure 見本



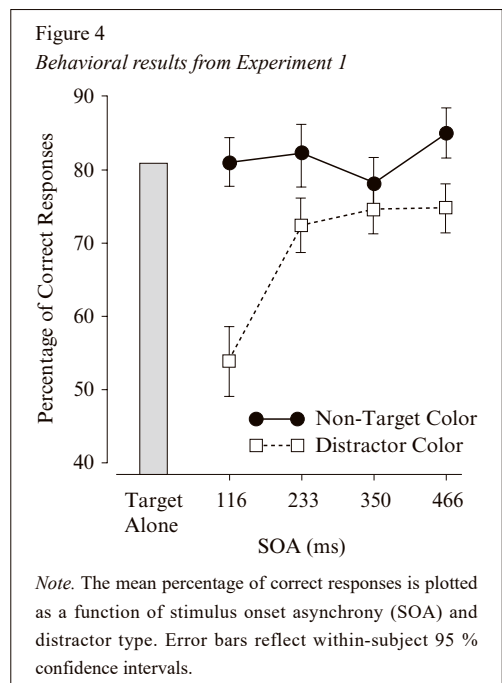
見本 3.5 Figure 見本



見本 3.6 Figure 見本



見本 3.7 Figure 見本



せずに続ける。

- (3) “*”, “**” や “†” などの符号は、5%, 1%, 10% の統計上の有意水準を示すときに用い、数値の右肩に示し、図の下部にその旨を示す。図全体に関する注、図中の特定部分に関する注がある場合は、その下に改行して記す。複数ある場合は改行せずに続ける。

3.10 引用文献（見本 3.8, p. 39）

引用文献は本文の次に一括して示す。見出しは「引用文献」（展望論文では「文献」とし、中央大見出しとする。読者が検索、参照できるように留意する。DOI（Digital Object Identifier）が付与されている文献については、DOI を記載する。なお、原稿作成時には改ページをして始める。

3.10.1 文献を引用する場合の一般的注意

- (1) 表記が2行以上にわたる場合は、2行目以降を全角2文字（半角4文字）分字下げする。
- (2) 日本語文献と外国語文献を分けず、著者名（姓）のアルファベット順とし、文献番号は付けない。
- (3) 刊行年
 - i) 文献の刊行年は、すべて刊行された西暦年を用いる。
 - ii) 刊行年には（ ）. を付ける。
 - iii) 複数年にわたり1巻を逐次刊行される場合は、(2011-2013). のように2つの年を2分ダッシュ（-）で結んで示す。
 - iv) 「心理学研究」のように1年1巻ではあるが、4月から翌年3月までの年度による場合には、掲載号の刊行年を記す。
- (4) 文献の表題は副題も含めて略さずに書く。日本語文献では、副題を2倍ダッシュ（——）ではさむ。外国語文献では、原則として表題と副題の最初の語の頭文字、固有名詞、ドイツ語の名詞は大文字とするが主要語の頭文字も大文字にしてもよい。なお、副題はコロン（:）のあとに続ける。
- (5) 逐次刊行物の誌名は、原則として正式名称を、省略せず記載する。

“*J Cog Neurosci*” ではなく “*Journal of Cognitive Neuroscience*”

- (6) 原則として、孫引きや2次的資料を利用した引用は控える。

3.10.2 外国語文献の表記の仕方

- (1) 著者名

- i) 一般的書き方

著者名は、姓を先に書き、カンマ（,）をおき、ファースト・ネーム、ミドル・ネームのイニシャルの順で書く。イニシャルのあとにはピリオド（.）を付ける。もし同姓で、イニシャルも同じ著者があるときは、名も略さずに書く。著者名の表記法は、原著者のそれに従う。

Nakamura, T. (2022). Yamada, Y. (2019)., Yamada, T. (2019). Sato, Takao (2013)., Sato, Tatsuya (2019).

見本 3.8 引用文献例

引用文献

- Ishii, K. (2011a). Changes in background impair fluency-triggered positive affect: A cross-cultural test using a mere-exposure paradigm. *Perceptual and Motor Skills*, 112, 393–400. <https://doi.org/10.2466/22.24.PMS.112.2.393-400>
- Ishii, K. (2011b). Mere exposure to faces increases attention to vocal affect: A cross-cultural investigation. *Cognitive Studies: Bulletin of the Japanese Cognitive Science Society*, 18, 453–461. <https://doi.org/10.11225/jcss.18.453>
- Ishii, K., & Eisen, C. (2016). Measuring and Understanding Emotions in East Asia. In H. Meiselman (Ed.), *Emotion Measurement* (pp. 629–644). Woodhead Publishing.
- Ishii, K., Eisen, C., & Hitokoto, H. (2017). The effects of social status and culture on delay discounting. *Japanese Psychological Research*, 59, 230–237. <https://doi.org/10.1111/jpr.12154>
- 深谷 達史 (2011a). 科学的概念の学習における自己説明プロンプトの効果——SBF理論に基づく介入—— 認知科学, 18, 190–201. <https://doi.org/10.11225/jcss.18.190>
- 深谷 達史 (2011b). 学習内容の説明が文章表象とモニタリングに及ぼす影響 心理学評論, 54, 179–196. https://doi.org/10.24602/sjpr.54.2_179
- 林 創・山田 剛史 (2015). 学術論文の読みを通したリサーチリテラシー育成の試み 日本教育心理学会第57回総会発表論文集, 611.
- 上瀬 由美子・高橋 尚也・矢野 恵美 (2017). 官民協働刑務所開設による社会的包摂促進の検討 心理学研究, 87, 579–589. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.87.15035>
- 生田目 光・猪原 あゆみ・浅野 良輔・五十嵐 祐・塚本 早織・沢宮 容子 (印刷中). 日本語版幸せへの恐れ尺度と日本語版幸せの壊れやすさ尺度の信頼性・妥当性の検討 心理学研究 Advance online publication. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.92.20206>
- 杉浦 淳吉 (2003). 環境配慮の社会心理学 ナカニシヤ出版
- 宇佐美 慧 (2020). 記述式問題の現在——テスト理論から見た検討課題—— 中村 高康 (編) 大学入試が分かる本——改革を議論するための基礎知識—— (pp.89–108) 岩波書店
- Whiston, S. C. (2013). *Principles and Applications of Assessment in Counseling* (4th ed.). Brooks/Cole, Cengage Learning.
- (ウィストン, S. C. 石川 信一・佐藤 寛・高橋 史 (監訳) (2018). カウンセリングにおけるアセスメントの原理と適用 (第4版) 金子書房)

ii) 共著（著者が20名以下）

すべての著者を書き、最後の著者の前にカンマ（,）と&をおく。andと綴らない。

Ishii, K., Ishikawa, S., & Sato, A. (2018).

iii) 共著（著者が21名以上）

著者が21名以上の場合は、第1から第19著者まで書き、途中の著者は“...”で省略表記し、最後の著者を書く。

(2) 書籍

書籍の場合は、著者名、刊行年、書籍名、初版以外は版数、出版社を書く。書籍名はイタリック体とする。

i) 一般的な例

著者姓, 名. (刊行年). *書籍名*. 出版社.

Christie, D. J. (2011). *The Encyclopedia of Peace Psychology*. Wiley.

著者1姓, 名., 著者2姓, 名., & 著者3姓, 名. (刊行年). *書籍名*. 出版社.

Rosen, L. D., Cheever, N., & Carrier, L. M. (2015). *The Wiley Blackwell Handbook of Psychology, Technology and Society*. Wiley.

ii) 版数

初版以外は必ず版数を明記しておく。版（edition）はed.と省略表記する。

著者姓, 名. (刊行年). *書籍名* (版数). 出版社.

American Psychiatric Association. (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders* (5th ed.). American Psychiatric Association.

iii) 編集書

編集者（editor）はEd.と省略表記し、編集者が複数のときはEds.と省略表記する。

編集者1姓, 名., 編集者2姓, 名., & 編集者3姓, 名. (Eds.). (刊行年). *書籍名*. 出版社.

Osaka, N., Rentschler, I., & Biederman, I. (Eds.). (2007). *Object recognition, attention, and action*. Springer.

iv) 編集書中の特定章

特定章著者1姓, 名., & 特定章著者2姓, 名. (刊行年). 特定章名. In 編集者1名. 姓 & 編集者2名. 姓 (Eds.), *書籍名* (xx ed., pp. xx-xx). 出版社.

Morioka, M. (2018). On the constitution of self-experience in the psychotherapeutic dialogue. In A. Konopka, H. J. M. Hermans, & M. M. Gonçalves (Eds.), *Handbook of Dialogical Self Theory and Psychotherapy: Bridging Psychotherapeutic and Cultural Traditions* (pp. 206-219). Routledge.

v) 数巻にわたる書籍

著者姓, 名. (刊行年). *書籍名* (Vols. 巻数). 出版社.

Freud, S. (1956-1974). *Standard editions of complete psychological works of Sigmund Freud* (Vols. 1-24). Hogarth Press.

vi) 数巻にわたる書籍の特定の1巻

著者姓, 名. (刊行年). 書籍名 (シリーズ編集者). 出版社.

Lamb, M. E. (Ed.). (2015). *Socioemotional processes* (R. M. Lerner, Series Ed.). *Handbook of child psychology and developmental science*. Vol.3. Wiley.

vii) 翻訳書

原著者姓, 名. (翻訳書刊行年). 翻訳書籍名 (翻訳者名. 姓 Trans.). 出版社. (Original work published 原書刊行年など)

von Helmholtz, H. (1925). *Treatise on physiological optics* (Vol.3, J. P. C. Southall, Ed., & Trans.). Optical Society of America. (Original work published 1910)

viii) 再版

著者姓, 名. (刊行年). 書籍名. 出版社. (Original work published 原書刊行年など)

Adler, A. (1970). *The education of children*. Gateway. (Original work published 1930, George Allen & Unwin)

(3) 逐次刊行物 (学術誌を含む雑誌, 年報, 紀要など)

逐次刊行物の場合は, 著者名, 刊行年, 表題, 誌名, 巻数, ページを書く。誌名, 巻数をイタリック体, 号数は () に立体, 引用文献の最初と最後のページを2分ダッシュ (-) で結んで示す。誌名の主要語の頭文字は大文字とする。DOI が付与されている場合は記載する。

巻を通してページが振られていない場合は, 号数は必ず記載する。ただし, 巻を通してページが振られている場合であっても, 号数を記載してもかまわない。

また誌名は, 原則として正式名称を, 省略せず記載する。

著者姓, 名. (刊行年). 論文表題. 誌名, 巻数 (号数), 引用ページ数. <https://doi.org/xxx>
Takahashi, N., Isaka, Y., Yamamoto, T., & Nakamura, T. (2017). Vocabulary and Grammar Differences Between Deaf and Hearing Students. *Journal of Deaf Studies and Deaf Education*, 22(1), 88-104. <https://doi.org/10.1093/deafed/enw055>

(4) オンライン資料の引用

i) 刊行された冊子体がある場合には, 冊子体を引用文献として記載する。

ii) 刊行されることが確定し, 刊行までの間, オンラインで早期公開 (Early View) されている場合, 刊行年の表記は (公開年) とし, 早期公開である旨と DOI を明記する。刊行されたあとは, 冊子体の表記に差し替える。

著者姓, 名. (刊行年). 論文表題. 誌名. Advance online publication. <https://doi.org/xxx>
Yokoyama, T., Kato, R., Inoue, K., & Takeda, Y. (2020). Cuing Effects by Biologically and Behaviorally Relevant Symbolic Cues. *Japanese Psychological Research*. Advance online publication. <https://doi.org/10.1111/jpr.12318>

iii) プレプリントされている文献の場合, アップロードサイト名と DOI を明記する。

著者姓, 名. (刊行年). 論文表題. アップロードサイト名. <https://doi.org/xxx>
Yoshimura, N., Morimoto, K., Murai, M., Kihara, Y., Marmolejo-Ramos, F., ... Yamada, Y. (2020). *Age of smile: A cross-cultural replication report of Ganel and Goodale (2018)*.

PsyArXiv. <https://doi.org/10.31234/osf.io/dtx6j>

- iv) オンライン上でのみ閲覧できる資料で、DOI がある場合は、DOI を記載する。

著者姓, 名. (刊行年). 論文表題. 誌名, 巻数 (号数), 記事番号. <https://doi.org/xxx>

Katahira, K., Kunisato, Y., Yamashita, Y., & Suzuki, S. (2020). Commentary: “A robust data-driven approach identifies four personality types across four large data sets.” *Frontiers in Big Data*, 3, 8. <https://doi.org/10.3389/fdata.2020.00008>

- v) オンライン上でのみ閲覧できる資料で、DOI がない場合は、次の書式で記載する。

著者姓, 名. (刊行年). 表題. ウェブサイト名. Retrieved アクセス年月日, from URL

Abrams, Z. (2020). Building a safe space in the pandemic. American Psychological Association. Retrieved December 31, 2021, from <https://www.apa.org/topics/covid-19/pandemic-safe-space#>

ただし、オンライン上から削除される可能性もあるため、編集委員会からの請求があった場合に備え、速やかに対応できるようにしておく必要がある。

(5) その他

i) 学位論文など

学位論文などの年次は年度によらず、修了、授与の年をもって示す。また抄録などが公刊されている場合は、それによる。

著者姓, 名. (修了/授与年). 表題 (Unpublished master's thesis, doctoral dissertation). 大学名.

Tsukamoto, S. (2015). *The Role of Psychological Essentialism in Intergroup Attitude Formation* (Unpublished master's thesis). Kyoto University.

ii) 学会などでの発表

引用ページについては、ページ数があるものについては記載する。

発表者姓, 名 (発表年). 表題 [発表形式]. 誌名/大会名, 開催地, 引用ページ.

Oe, T., Aoki, R., & Numazaki, M. (2016). *Perceived causal attributions of body temperature increase as a moderator of the effects of physical warmth on implicit associations of social warmth* [Poster presentation]. The 17th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, San Diego, CA.

iii) 印刷中の論文

刊行されることが確定してはいるが未刊行の場合、刊行年の代わりに“(in press)”と明記する。

著者姓, 名. (in press). 表題. 誌名.

O'Seaghdha, P. G. (in press). Across the great divide: Proximate units at the lexical-phonological interface. *Japanese Psychological Research*.

iv) 新聞記事の引用

執筆者姓, 名 (分からなければ掲載紙 (誌) 名). (発行年). 資料表題. 掲載紙(誌)名, 発行日 (朝刊・夕刊), 掲載ページ.

Uematsu, K. (2015). Kids learn about life by raising animals at school. *Japan News*, March 13, 16.

3.10.3 日本語文献の表記の仕方

(1) 著者名

- i) 著者名は、姓、名の順に書き、姓と名の間にはカンマ (,) をつけず半角あける。著者名の後にはピリオド (.) は付けない。

小林 哲郎 (2019).

- ii) 共著 (著者 20 名以下) の場合には、各著者の間に中黒 (・) を入れて結ぶ。

齊藤 慈子・笹川 智子・鈴木 敦命 (2020).

- iii) 共著 (著者が 21 名以上) の場合には、第 1 から第 19 著者まで書き、途中の著者は「…」で省略表記し、最後の著者を書く。

- iv) 政府・官公庁・研究機関・学協会組織・一般民間組織など団体名義の著作物は、正式の名称を略さずに書き、個人著者名の場合と同様に、アルファベット順に並べる。なお、法人区分の記載は不要である。

- v) 著者名がない文献の場合は、表題によってアルファベット順に入れる。

(2) 書籍

書籍の場合は、著者名、刊行年、書籍名、出版社を書く。

- i) 一般的な例

著者姓 名 (刊行年). 書籍名 出版社

一川 誠 (2016). 「時間の使い方」を科学する——思考は 10 時から 14 時、記憶は 16 時から—— PHP 研究所

- ii) 新・改訂版 (増刷に際し、内容がそのままならば版数の記載は不要)

著者姓 名 (刊行年). 書籍名 版数 出版社

長谷川 寿一・東條 正城・大島 尚・丹野 義彦・廣中 直行 (2020). はじめて出会う心理学 第 3 版 有斐閣

- iii) 編集書・監修書

監修者姓 名／編集者姓 名 (監修／編) (刊行年). 書籍名 出版社

堀 洋道 (監修) 吉田 富二雄・松井 豊・宮本 聡介 (編) (2009). 新編 社会心理学 改訂版 福村出版

- iv) 編集書・監修書の特定章

著者姓 名 (刊行年). 表題 編集者姓 名 (編／監修) 書籍名 (pp. 引用ページ) 出版社

内藤 美加 (2018). 記憶の発達と心的時間移動——自閉スペクトラム症の未解決課題再考—— 鈴木 國文・内海 健・清水 光恵 (編) 発達障害の精神病理 I (pp. 73-96) 星和書店

- v) 数巻にわたる書籍 (主題を持つ叢書・集書等を含む)

監修者姓 名／編集者姓 名 (監修／編) (刊行年). 書籍名 (総巻数) 出版社

野島 一彦・繁樹 算男（監修）（2018-2020）. 公認心理師の基礎と実践（全23巻）
遠見書房

vi) 数巻にわたる書籍の特定の1巻

著者姓名（刊行年）. 書籍名 監修／編集者姓名（監修／編）シリーズ名 巻数など
出版社

浅野 倫子・横澤 一彦（2020）. 共感覚——統合の多様性—— 横澤 一彦（監修）シ
リーズ統合的認知 勁草書房

vii) 翻訳書

原著者姓, 名. (原書籍刊行年). 原書籍名. 出版社.

(原著者姓, 名 (※カタカナ) 翻訳者姓 名 (訳) (翻訳書刊行年). (翻訳書籍名)
翻訳書出版社)

Lopez-Corvo, R. E. (2009). *The Woman Within: A Psychoanalytic Essay on Femininity*. Rout-
ledge.

(ロペス-コルヴォ, R. E. 井上 果子 (監訳) 飯野 晴子・赤木 里奈・山田 一子
(訳) (2014). 内なる女性——女性性に関する精神分析的小論—— 星和書店)

viii) 著（編集・監修）者（個人または団体）自身が刊行者である場合（自費出版など）に
は，一般的な書籍の例に準じて記載し，出版社の部分を（自費出版）と書く。

(3) 逐次刊行物（学術誌を含む雑誌，年報，紀要など）

逐次刊行物の場合は，著者名，刊行年，表題，誌名，巻数，ページを書く。巻数をイ
タリック体，号数は（ ）内に立体，引用文献の最初と最後のページを2分ダッシュ
(-)で結んで示す。誌名の主要語の頭文字は大文字とする。DOIが付与されている場
合は記載する。

巻を通してページが振られていない場合は，号数を必ず記載する。ただし，巻を通し
てページが振られている場合であっても，号数を記載してかまわない。

また誌名は，原則として正式名称を，省略せず記載する。

i) 論文

著者姓 名 (刊行年). 表題 誌名, 巻数, 引用ページ. <https://doi.org/xxx>

川上 直秋 (2019). 指先が変える単語の意味——スマートフォン使用と単語の感情価
の関係—— 心理学研究, 91(1), 23-33. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.91.18060>

ii) 年間2冊またはそれ以上を刊行するが，巻数がなくて通し番号になっている場合
（号，輯，集など）

著者姓 名 (刊行年). 表題 誌名／シリーズ名, 号数, 引用ページ.

齊藤 慈子 (2019). 時に手を抜くイクメン，マーモセットのパパ 心理学ワールド,
No.86, 25-26.

iii) 年報・年鑑

年次ごとに巻・号・輯など番号付けしてあるものは，上の例に準ずる。単に年次のみ
を示してあるものについては，刊行年と一致する場合には，刊行年のみでよい。

刊行年と表題の年次が異なる場合（たとえば、2013年版で、2012年中に刊行された場合など）には、巻数の後ろに（ ）を付し、（ ）内に2013年版などのように記す。

著者姓 名（刊行年）. 誌名 出版社

法務総合研究所（2019）. 令和元年版 犯罪白書——平成の刑事政策—— 昭和情報プロセス

iv) 紀要, その他

紀要, 報告書の名称が同一で、いくつかの部門、シリーズに分かれているものには、表題の直後に続けて、その部門やシリーズの名称を記す。なお、紀要, 報告等の名称に、その大学などの名称が含まれていない場合は括弧に入れて記す。

著者姓 名（刊行年）. 表題 誌名, 巻数(号数), 引用ページ.

中道 圭人（2019）. 幼児における他者の感情推測のための表情と身体的手がかりの利用 千葉大学教育学部研究紀要, 67, 285-292.

(4) オンライン資料の引用

i) 刊行された冊子体がある場合には、冊子体を文献として記載する。

ii) 刊行されることが確定し、刊行までの間、オンラインで早期公開されている場合、刊行年の表記は（公開年）とし、早期公開である旨とDOIを明記する。刊行されたあとは、冊子体の表記に差し替える。

著者姓 名（公開年）. 表題 誌名, Advance online publication. <https://doi.org/xxx>

金政 祐司・古村 健太郎・浅野 良輔・荒井 崇史（2021）. 愛着不安は親密な関係内の暴力の先行要因となり得るのか？——恋愛関係と夫婦関係の縦断調査から—— 心理学研究 Advance online publication. <https://doi.org/10.4992/jpsy.92.20013>

iii) プレプリントされている文献の場合、アップロードサイト名とDOIを明記する。

著者姓 名（公開年）. 論文表題 アップロードサイト名. <https://doi.org/xxx>

vi) オンライン上でのみ閲覧できる資料で、DOIがある場合は、DOIを記載する。

著者姓 名（公開年）. 表題 誌名, 巻数(号数), 引用ページ（記事番号）. <https://doi.org/xxx>

矢嶋 美保・長谷川 晃（2013）. 家族機能が中学生の社交不安に及ぼす影響——日本の親子のデータをを用いた検討—— 感情心理学研究, 27(3), 83-94. https://doi.org/10.4092/jsre.27.3_83

v) オンライン上でのみ閲覧できる資料で、DOIがない場合は、次の書式で記載する。

著者姓 名（公開年）. 表題 ウェブサイト名 Retrieved アクセス年月日 from URL

日本心理学会（2022）. 執筆・投稿の手びき 2022年版 日本心理学会 Retrieved October 25, 2022 from <https://psych.or.jp/manual/>

ただし、オンライン上から削除される可能性もあるため、編集委員会からの請求があった場合に備え、速やかに対応できるようにしておく必要がある。

(5) その他

i) 学位論文など

学位論文などの年次は年度によらず、修了、授与の年をもって示す。また抄録などが公刊されている場合は、それによる。

著者姓 名（修了／授与年）．表題 大学名修士／博士論文（補足情報：たとえば未公刊など）

向田 久美子（2009）．語りに見るライフ・スクリプトの文化心理学的研究——文化圏間比較と世代間比較を通して—— 白百合女子大学大学院博士論文

ii) 学会などでの発表

予稿集や抄録などがある場合、より詳細な掲載誌を記す。

著者姓 名（刊行／発表年）．表題 誌名／大会名、引用ページ

著者姓 名（刊行／発表年）．表題 誌名／大会名（開催地名）

都築 誉史・武田 裕司・千葉 元気（2018）．認知資源が多肢選択意思決定における魅力効果に及ぼす影響——聴覚プローブ法を用いた実験的検討—— 日本心理学会第82回大会発表論文集, 493.

iii) 印刷中の論文

刊行されることが確定してはいるが未刊行の場合、刊行年の代わりに（印刷中）と明記する。

著者姓 名（印刷中）．表題 誌名

長谷川 龍樹・多田 奏恵・米満 文哉・池田 鮎美・山田 祐樹・高橋 康介・近藤 洋史（印刷中）．実証的研究の事前登録の現状と実践—— OSF 事前登録チュートリアル—— 心理学研究

iv) 新聞記事および雑誌記事の引用

執筆者姓 名（分からなければ掲載紙（誌）名）（発行年）．資料表題 掲載紙（誌）名 発行日（朝刊・夕刊）, 掲載ページ．

サトウ タツヤ（2013）．ちょっとココロ学——悩み事 どうやって打開？—— 読売新聞 7月8日夕刊, 7.

3.10.4 引用文献の記載順序

- (1) 引用文献は、日本語文献と外国語文献を分けず、共著の場合も、第1著者の姓のアルファベット順に配列することを原則とする。同姓の者が複数いる場合には、名のアルファベット順による。
- (2) 同一著者が、単独で発表している文献と、その著者が第1著者として名を連ねている共著の文献がある場合には、単著を先にし、次に共著を並べる。また、第1著者が同一で、第2著者が異なるときは、刊行年ではなく、第2著者の姓のアルファベット順にそれらを並べる。第3著者以降も同様である。

Kobayashi, T. (2018).

Kobayashi, T., Saito, A., & Sasagawa, S. (2017).

Kobayashi, T., & Suzuki, A. (2019).

- (3) 同一著者の、あるいは同一配列の共著の文献がいくつかある場合には、早い刊行年のも

のから順に並べる。同一年に刊行された文献がいくつかある、あるいは、本文への引用の際の省略表記が同一となる場合、刊行年のあとに、文献名のアルファベット順で、アルファベット小文字 a, b…を付して区別する。

Takahashi, F. (2013a).

Takahashi, F. (2013b).

3.11 英文アブストラクトとキーワード

3.11.1 英文アブストラクト

- (1) 100—175 語の英文アブストラクトならびにその日本語訳を添付する。英文アブストラクトには問題（目的）、方法、結果、考察または結論を含める。
- (2) 英文については、ネイティブの専門家の、責任ある校閲を経た文章であることが不可欠である（なお、査読を終了し掲載の決定した論文の英文アブストラクトなどは、事務局編集部において英文校閲業者に依頼し、校閲を行う）。
- (3) 英文アブストラクトの日本語訳は、英文校閲の際に参考にするため、直訳ではなく、著者の意図を平易な日本語で述べたものとする。また、採択となった際に学会ホームページで公開する。
- (4) 数は算用数字で示す。ただし、10 未満の数および文頭では文字で綴る。
- (5) 英文アブストラクト内では、先行研究への言及が必要な場合を除き、引用はしない。

3.11.2 キーワード

英文アブストラクトの下にその論文の分類、検索などのための、その論文を特徴づける英語のキーワードを 3—5 項目つける。検索の便のため、次の基準に従う。

- (1) キーワードは名詞または名詞句であり、複数形をとり得るもの（countable noun）は複数形で示す。

（例）theory — theories, mouse — mice, child — children

- (2) 原則として略語は使わない。
- (3) 英文アブストラクトまたは本文中と異なった語を用いてもよい。

（例）hyperactivity — hyperkinesis, quantification — measurement

- (4) 固有名詞（氏名、地名、テスト名など）もキーワードになり得る。なお固有名詞などのように大文字を使う必然性がある場合以外はすべて小文字で書く。

（例）Freud (Sigmund), Wechsler Adult Intelligence Scale

3.12 電子付録

論文の補足資料として、J-STAGE の電子付録機能を利用することができる。詳細は学会ホームページを参照されたい。

— 〈キーワードの設定はその後の引用に影響する〉 —

キーワードは論文の内容を表すものでなければならないことは当然だが、同時に他の研究者から検索されやすいものでなければならない。いかに内容を的確に表すものであっても、キーワードとして一般的でない用語を設定したのでは、他の研究者から検索される機会がなく、したがって引用されることもない。

そのためには、自ら設定したキーワードを用いて PsycINFO (APA) などのデータベースにおいて検索してみるというのも一つの方法であり、そのキーワードで文献がほとんど検索されなければ、そのキーワードは避けるべきである。

また、日本心理学会編集委員会刊行の、“*Japanese Psychological Research*” 50 周年記念号 (Vol. 51, No. S1, 2009) のキーワードを調べてみると参考になる。

自分の論文を他の研究者に知ってもらう上で、キーワードの設定は慎重に行う。

第4章 “*Japanese Psychological Research*” の 投稿原稿の作り方

本章では、“*Japanese Psychological Research*” へ論文を投稿する際に、守らなくてはならない一般的な約束が述べられている。投稿論文（投稿原稿）を作成するために必要な事柄を、掲載される学術論文の形式にあわせて説明している。

4.1 “*Japanese Psychological Research*” について

(1) Aims & Scope

Japanese Psychological Research (JPR), the flagship journal of the Japanese Psychological Association, is a peer-reviewed journal publishing high-impact research from all areas of scientific psychology. JPR publishes Original Articles, Brief Reports, and Reviews. JPR welcomes high quality articles from researchers in Japan and any part of the world, which employ novel approaches and contribute to advancing psychological research of broad interest and theoretical significance. Please visit the Author Guideline for specific information on submission.

4.2 論文の種類、形式

4.2.1 論文の種類と定義

- (1) Original Article：原則として、問題提起と実験、調査、事例などに基づく研究成果、理論的考察と明確な結論をそなえた研究。新たな実験装置や解析プログラムの開発、新たな心理測定尺度の作成やデータベースの構築など、研究の遂行に有用な新たな方法、技術およびデータに関する報告も含む。最大 10,000 語。
- (2) Brief Report：すでに公刊された研究成果に対する追加、吟味、新事実の発見、興味ある観察、少数の事例についての報告、速報性を重視した報告、萌芽的発想に立つ報告。最大 5,000 語。
- (3) Review：心理学の最近の重要テーマについて、研究状況、主要成果、問題点等を解説し、研究の意義と今後の課題を論じる。編集委員会から執筆依頼を行う “Invited Review” を含む。最大 20,000 語。

これらの文字数の制限には、引用文献、表、図を含めない。また、この制限は初回投稿時のみ適用され、著者は投稿時にこれらの文字数について申告する。

4.2.2 論文の形式

論文は英語とし、投稿原稿は A4 判の白紙を縦置きにして使用する。各ページは、上下、左右に 3 cm 以上の余白を取り、一般的フォント（見やすいもの）および 10.5 ポイン

ト以上のサイズの文字を使用する。1 ページに入る行数はフォント、サイズにより異なるが、25 行を目安とする（見本 4.1）。原稿には通しページを付ける。なお英語については、ネイティブの専門家の責任ある校閲を経た文章であることが不可欠である。

4.3 論文情報

4.3.1 表題

表題は、論文の内容に即したものとし、長さは、12—15 語程度とする。副題は、できるだけ避ける。一連の研究の場合でも、番号の異なる同一表題は好ましくない。やむをえずそうする場合は副題としてそれを用い、主題は別に付ける。副題は主題の後にコロン

見本 4.1 “Japanese Psychological Research” 本文原稿見本

4 compared reaction times in gaze and arrow cue conditions to examine differences
5 between biologically and behaviorally relevant symbolic cues. To this end, we used a dual
6 task paradigm comprising a cuing task with gaze and arrow cues and a spatial working
7 memory task to examine differences between biologically (gaze) and behaviorally
8 (arrow) symbolic cues.

9

10 Experiment 1

11 Method

12 **Participants.** 28 participants (13 females, age range: 18-28) took part in this
13 experiment as paid volunteers. All had normal or corrected-to-normal acuity of vision and
14 were naïve to the purposes of this experiment. The study was approved by the institutional
15 review board of the National Institute of Advanced Industrial Science and Technology.
16 All participants provided informed consent before starting the experiment.

17 **Apparatus.** Visual stimuli were presented on a 24.5 inch LCD display (ASUS
18 ROG SWIFT PG258Q, 1920 × 1080 resolution). Display and data collection were
19 controlled using the Psychophysics Toolbox of MATLAB (Brainard, 1997; Pelli, 1997)
20 on Microsoft Windows 7 (refresh rate 120 Hz). The viewing distance was approximately
21 57 cm.

22 **Visual stimuli and procedure.** We used a dual task paradigm consisting of
23 cuing (gaze and arrow) and spatial working memory tasks. The spatial working memory
24 task resembled that of Woodman and Luck (2004), although we used a cuing task with
25 gaze and arrow stimuli in place of their visual search paradigm. We conducted a single

(Yokoyama, T., Kato, R., Inoue, K., & Takeda, Y. (2022). Cuing Effects by Biologically and Behaviorally Relevant Symbolic Cues. *Japanese Psychological Research*, 64(3), 308-319. <https://doi.org/10.1111/jpr.12318> に一部変更して収載)

(:) をつけて続ける。主要語の頭文字は大文字にする (3 文字以下の接続詞, 冠詞, 前置詞は小文字とする)。

4.3.2 著者名

著者名は省略せず, ローマ字 (英語, 原語) で名 (ファースト・ネーム), 姓 (ファミリー・ネーム) の順で表記する。著者が, 改姓 (名) をした場合は, 括弧内に併記するのではなく, 脚注として旧姓 (名) を明示することが望ましい。

連名者は, その論文の内容に責任を持つ協力者に限られ (単なる補助者, 部分的協力者は, 連名者とはせず, 必要があれば「表題ページ」の脚注において謝辞を述べる), 研究貢献度に従って順に並べることを原則とする。なお, これらは著者情報にあたるため, 電子投稿システムにのみ入力し, 原稿には含めない。

4.3.3 所属機関名

所属機関名は英語の正式名称を, すべての著者について記す。所属機関名は, 部局などは記載しない。たとえば大学の場合, 大学名のみを掲載し, 研究科・学部, 学科, 専攻などは必要があれば「表題ページ」の脚注として付記する。なお, これらは著者情報にあたるため, 電子投稿システムにのみ入力し, 原稿には含めない。

- (1) 著者の所属機関が, 投稿時から変わった場合, あるいは研究を行った機関が, 現所属機関とは異なる場合は, 「表題ページ」の脚注にその旨を記す。
- (2) 非常勤の勤務先を所属機関として掲載する場合は, 当該機関の承諾を必要とする。

4.3.4 「表題ページ」の脚注

「表題ページ」の脚注は, 掲載時, 表題ページの欄外に印刷される。脚注を付ける場合, 該当箇所の右肩に上つき数字 (^{1, 2, 3...}), 通し番号で脚注番号を付ける。「表題ページ」の脚注で示す例をあげる。

- (1) 文部科学省, 日本学術振興会などの科学研究費補助金などによる研究の発表である場合, 大会で発表している場合など, 研究についての補足は, 表題 (主題) に脚注番号を付ける。

¹This study was supported by Grant-Aid for Scientific Research, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, xxx from Japan Society for the Promotion of Science.

²Experiment 2 was presented at the 82nd Annual Convention of the Japanese Psychological Association (Sendai, Japan).

- (2) 謝辞を述べたい場合, 第1著者名に脚注番号を付ける。
- (3) 著者が改姓 (名) をした場合や, 所属機関については, 該当の著者名に脚注番号を付ける。
- (4) 論文に関する連絡先は, 掲載時の英文連絡先とし, 共著の場合は, その論文に関して責任をもって対応できる者の, 著者名, 所属機関名, 住所, メールアドレスを次の要領で示す。

Correspondence concerning this article should be sent to: 著者名, 部局, 所属機関名, 町, 区, 市, 都道府県 郵便番号, 国名, (メールアドレス)

Correspondence concerning this article should be sent to: Taro Shinri, Department of Psychology, Faculty of Letters, xxx University, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-xxxx, Japan. (E-mail: xxx@xxx)

4.4 本文

4.4.1 見出し（見本 4.1, p. 50）

本文での見出しは、以下の3種類のみ用いられる。見出しには番号を付けない。なお、本文冒頭には、見出しを記載しない。

- (1) 中央大見出し：行の中央にゴシック、ボールド体で、ピリオド（.）を付けない。その上下はそれぞれ1行ずつあける。主要単語の頭文字は大文字にする。
- (2) 横大見出し：行の左端から、ゴシック、ボールド体で、ピリオド（.）を付けない。本文は改行して始める。主要単語の頭文字は大文字にする。
- (3) 横小見出し：行の左端から2文字あけ、ゴシック、ボールド体で、ピリオド（.）を付ける。本文は、同行に2文字あけて続ける。第1語の頭文字は大文字にする。

4.4.2 段落・見出し以外の序列

内容のまとまりごとに段落をつける。段落ごとに改行し、左端から半角4文字程度（10 mm 程度）字下げする。

- (1) 段落に序列をつける

関連性のある内容の段落に序列をつける場合は、算用数字で番号を付け、文章で簡潔に表現し、順次改行して用いる。コロンの（:）やスペースを入れるなど、見出し扱いにはできない。

1. ...
2. ...
3. ...

- (2) 段落内で序列をつける

文章中、または段落内で序列をつける場合には、(a)..., (b)..., (c)..., のようにアルファベットに括弧を付け、改行せずに文章を続けていく。コロンの（:）やスペースを入れるなど、見出し扱いにはできず、(1), 1), ①, a) などは使用できない。

4.4.3 「本文中」の脚注

「本文中」の脚注は、論旨を進めていく上で参考になることや、本文中に入れると混乱を招くような事柄の補足的説明に用い、最小限にとどめる。

- (1) 掲載時、該当ページの欄外に印刷される。
- (2) 「表題ページ」の脚注から続く通し番号を、該当箇所の句読点のあとの右肩に上つき数字（¹, ², ³, ⁴...）で付ける。見出しには付けない。
- (3) 脚注文は、原稿の引用文献の次のページにまとめて記す。
- (4) 著作権に関する注釈は、必要であれば「本文中」の脚注に記載する。
- (5) 抄録が公刊されていない場合、また書簡、私的な小集会での発表、発言、非公式の意見

交換などは私信 (Personal communication, 年月) として扱い, 引用文献ではなく「本文中」の脚注に記す。

4.4.4 句読法

- (1) 句点 (.) と読点 (,)

句点はピリオド (.), 読点はカンマ (,) を用いる。

- (2) ハイフン (-)

対語・対句の連結, 合成語に用いる。

- (3) ダッシュ (—)

注釈の説明を挿入する際に用いる。2 分ダッシュ (半字分: -) は, 期間, 引用文献のページを表すのに用いる。

- (4) 引用符 (“ ”)

引用符は “ ” を用いる。

- (5) 丸括弧 ()

原則として, () を使用する。

- (6) コロン (:)

例, 説明, 仮説, 引用文などを導く場合, 副題などに用いる。

- (7) セミコロン (;)

検定結果を列挙する場合, あるいは括弧内に引用文献を列挙する場合に用いる。

4.4.5 英語以外の外国語

本文中において, 用語を英語以外の外国語表記で, そのまま表記することは, 可能な限り避けるようにする。なお, 次の場合には英語以外の外国語を用いることができ, 必要があれば, 初出のときにその言語を括弧内に書き添える。

- (1) 外国人氏名などの固有名詞
- (2) 引用文献, テスト名, 尺度名
- (3) 動植物のラテン語学名

4.4.6 略語

一般に用いられている略語以外はなるべく用いない。略語法について注意すべき点を次に列挙しておく。

- (1) テスト名や長い専門用語の略語を用いるときは, 原典初出のときに括弧内に略語を付ける。
- (2) 略語には大文字を用いる。字間をあけたりピリオドを付けたりする必要はない。特にピリオドを付けた形で用いることが慣習になっている場合には, 慣習どおりの形で用いる。

4.4.7 特殊文字

- (1) イタリック体

イタリック体を単なる強調のために用いることは望ましくない。なお, 次の場合にはイタリック体を用いることができる。

- i) 図表の題
 - ii) 本文中に引用されている書籍名、雑誌の名称と巻数
 - iii) 統計法に用いられる記号（例： M , SD , t , F , p , df , ns など）
 - iv) 動植物のラテン語学名および初出の専門用語
- (2) ボールド体

ボールド体の使用は、原則として本文中の見出しと、表の因子構造を強調する数値に限られる。本文中で特定の語句を強調するために用いることはできない。

- (3) アンダーライン・傍点
- 原則として用いない。

4.5 数字・数式、統計記号

4.5.1 数字

- (1) 算用数字

数を表示する場合は、原則として算用数字を用いる。ただし、10未満の数、および文頭では文字で綴る（たとえば、文頭では、21 participants...ではなく、Twenty-one participants...とする）。

- (2) ローマ数字

原則として慣用表現（たとえば、Type II error）などの記述にのみ用いる。

4.5.2 数式

論文中の数式には、すべて通し番号を付ける。

- (1) 数学記号、量記号および変数の記号はイタリック体とし、なるべくJIS（Z8201, Z8202参照）などで定められたものを使用する。
- (2) 単位、演算を表す記号はローマン体を使用する。
- (3) 分数式は原則として、 $\frac{(a+b)}{(c+d)}$ のように表し、本文中に入れるときは、 a/b , $(a+b)/(c+d)$ のように表す。
- (4) $\sin$, $\log$, $\exp$ などの記号は、ローマン体で表す。
- (5) 2つ以上の関連する数式を続けて上下に並べて書くときには、等号の位置でそろえる。

4.5.3 統計記号、その他

- (1) 統計概念の記号として用いる文字は、イタリック体とする。疑問の点はJISなどを参照する。原則として、分散分析表は含めない。 t (), F () などの書き方については、統計学辞典の凡例などを参照されたい。

検定結果については、 t , F , χ^2 などの検定統計量の値、自由度、 p 値、および効果量と効果の方向を記述する。なお、 p 値については正確な値を小数点以下2桁あるいは3桁で記述し、 p 値が.001より小さいときは、 $p < .001$ と記述する。点推定値（標本平均や回帰係数など）を示す場合には、推定精度に関する情報（標準誤差など）をあわせて示す。論文中では一貫した有意水準によって信頼区間を表示することが望ましい。

資料に対して行った各種統計的検定の結果を文末で示すときには、文をカンマ (,)

で区切り以下のように続ける。

$$F(1, 10) = 6.18, p = .032, \text{est } \omega^2 = .07; F(4, 40) = 22.71, p < .001, MSe = 0.005$$

$$t(22) = 2.40, p = .013, d = 0.65, 95\% \text{ CI } [0.35, 0.95]$$

$$\chi^2(4, N = 90) = 10.51, p = .033$$

- (2) 百分率はすべて % の記号を用いる。
- (3) 特殊な記号、たとえば Hull の理論に用いられている SHR のようなものは、特に明記し、大文字、小文字、字体、上つき、下つきなどを明確にしておく。
- (4) 欠測を伴うデータを分析する場合には、欠測の頻度や件数を示すとともに、採用した欠測発生モデルと対応方法を記述する。
- (5) 統計的仮説検定も含めて推測統計の場合は、 p 値、効果量、信頼区間を記載する。

4.6 単位

計量単位は、原則として国際単位系 (SI) を用いる。ただし SI 以外の単位も編集委員会で適当と認められた場合は使用できる。

4.6.1 国際単位系

基本単位と組立単位があり、それぞれ固有の名称と記号が与えられている。基本単位、組立単位ならびにそれらに併用できることを国際度量衡委員会が認めている単位のうち、心理学に関係あるものを付録 1 (pp. 70–74) に記す。

4.6.2 分量・倍量単位を表すための接頭語

基本単位、組立単位、併用単位のままでは大きすぎたり、小さすぎたりする場合、その 10 の整数倍 (10^{-24} から 10^{24} までの分量・倍量) を表す接頭語を使用できる (付録 1-4, Table 11, p. 73)。

4.6.3 単位記号の使用

- (1) 単位記号は、ローマン体を用い、一般に小文字で表すが、記号が固有名詞に由来する場合と、 10^6 以上の接頭語には大文字を用いる。
- (2) セルシウス度 (摂氏) $^{\circ}\text{C}$ 、国際単位に併用できる単位である min (分), h (時), d (日), $^{\circ}$ (度), ' (分), " (秒), および L (リットル) は使用できる。
- (3) 単位記号には、複数形やピリオド (.) を付けない。たとえば min. のようにピリオド (.) は付けず、min とする。接頭語は 1 個のみを使用し、単位記号の前にそれと一体のものとして示す。ただし、基本単位の kg のみは kg でなく、g に 1 個の接頭語が付くように接頭語を選ぶ。たとえば、1 kkg ではなく、1 Mg とし、1 μm は m の前に 2 つの接頭語が付くので避け、1 nm とする。
- (4) 単位の前にくる数値が 0.1 から 1,000 の範囲になるように接頭語を選ぶ。たとえば 2,000 kg でなく 2 Mg とし、0.00394 m でなく 3.94 mm とする。ただし、同一の表や一連の文章の中でいくつかの数値を比較するときなどは、この範囲を超えても同一の接頭語を用いたほうがよい。
- (5) 組立単位に接頭語を付ける場合は、接頭語が先頭にだけ付くようにする。たとえば

1 $\mu\text{m/ms}$ でなく 1 mm/s とする。

- (6) 組立単位が2個以上の単位の積として構成されている場合は、乗法の記号として、 $\text{N} \cdot \text{m}$ のように点（中黒）をはさんで表すが、誤解の恐れがなければ N m のように点を省略してもよい。しかし、これを mN と表してはいけない。 mN はミリニュートンでニュートン・メートルではない。 m は、「ミリ」と「メートル」の両方を表すので特に注意する必要がある。
- (7) 組立単位が2個以上の単位の除算で構成されている場合は、 m/s のように斜線、または、 $\text{m} \cdot \text{s}^{-1}$ のように負の指数で表してもよい。ただし、斜線を2個以上使用してはならない。たとえば、 W/sr/m^2 とはせず、 $\text{W} \cdot \text{sr}^{-1} \cdot \text{m}^{-2}$ または $\text{W}/(\text{sr} \cdot \text{m}^2)$ とする。
- (8) 量を表す数字と単位との間には 100 m のように半角の空白をおく。またやむをえず大きな数を表示しなければならない場合は 86,400 m のように3桁ごとにカンマで区切る。
- (9) dB（デシベル）はSIに含まれないが、使用することができる。

4.6.4 SIに適しない例

国際単位系では不適当とみなされる例と、その正しい表し方を付録に示す（付録1-5, Table 12, p. 74）。

4.7 引用・言及

4.7.1 文献の引用

(1) 著者名・刊行年

本文中に文献を引用する場合、著者名（姓、ファミリー・ネーム）の直後に刊行年を添える。

i) 本文中に文章として入れる場合

“Naito (2018) presented ...”

ii) 括弧内に文献を示す場合

“...be experienced (Hashiya, 2019).”

iii) 同一著者で、同一年に刊行された文献がいくつかある場合、刊行年のあとにアルファベット小文字 a, b... を付して区別する。

“Hasegawa (2017a) found..., and Hasegawa (2017b) examined...”

“... within the tasks (Hasegawa, 2017a, 2017b).”

“Harada et al. (2021a, 2021b) showed...”, “... (Harada et al., 2021a, 2021b).”

iv) 異なる著者で、同一姓の文献の引用があり、混同の恐れのある場合、イニシャルを添える。

“In this paper, T. Yamada (2016) ...”, “in psychological studies (Y. Yamada, 2016).”

(2) 自著の引用

著者自身の既刊文献の引用は、“Author...” などとせず、“Mukaida (2017)...” のようにする。

(3) 共著（著者2名）

著者が2名の共著の場合は、引用のたびごとに両著者名を書く。本文中は“and”，括弧内は“&”を用いる。

“Morioka and Moriya (2020) showed...”, “... (Morioka & Moriya, 2020).”

(4) 共著（著者が3名以上）

i) 著者が3名以上の共著の場合，初出の際から，第1著者名以外は“et al.”と略記する。

“Harada et al. (2021) showed...”, “... (Harada et al., 2021).”

ii) 複数著者の論文を“et al.”表記にした結果，同じ省略表記のものが複数できてしまう場合は，論文間の区別がつくまで著者名を書く。

“Harada, Nakamura, Asano et al. (2021) showed...”

“... (Harada, Nakamura, Kamise et al., 2021).”

iii) 省略表記をした結果，最後の著者だけが異なる場合は，“et al.”とせず，最後の著者まで書く。

“Harada, Nakamura, Fukaya, Kamise, and Asano (2021) showed...”

“... (Harada, Nakamura, Fukaya, Kamise, & Ishii, 2021)”

(5) 翻訳書の引用

翻訳書を引用する場合は，原著者名と，その刊行年，翻訳書の刊行年を表記する。

“Otto (2000/2019) ...”, “(... Otto, 2000/2019).”

(6) 文献引用の順序

本文中の同一箇所では複数の文献を引用するときには，文末の同じ括弧内に著者名のアルファベット順にセミコロン（;）で区切り，また同一著者については，刊行年順に並べてそれらをカンマ（,）で区切り示す。

“... (Fukaya, 2018; Fukaya & Ikeda 2015; Ikeda et al. 2015, 2016).”

4.7.2 文章の引用

(1) 文献の記述の一部を直接引用するときには，原文（あるいは原文の英訳）のとおり正確に転記（英訳）する。

(2) 引用文が40語以内の場合は，別行とせずに本文に続け，引用符（“ ”）で囲む。

(3) 引用文が40語を超える場合は，引用文の前後をそれぞれ1行ずつ開けて記載する。

(4) 引用文中にさらに引用句があるときには，内側に‘ ’を用いる。

(5) 引用文には，末尾に著者名，刊行年，掲載ページを書き添える。

“... (Itakura, 2018, pp. 150–152).”

(6) 原典が入手困難なために翻訳書による場合は，翻訳書の引用の仕方に従い，掲載ページを明記する。

“... (Ebbinghaus, 1885/1978, p. 93).”

(7) 文章を引用する際には，著作権者の許可が必要な場合があるので注意する。

(8) 原文の一部を省略した場合には，“...”で示す。

4.7.3 図・表の引用

(1) 図や表について本文中で言及するときには，Figure 1, Table 1のように表記する。

- (2) 他の文献の図や表を引用する場合は、その旨が明確になるように出典（著者名、刊行年、掲載ページ、原典の図・表の番号）を括弧内に書き添える。

“Figure 1. *Research Model of Experiment 1* (Ito, 2017, p. 120, Figure 3).”

- (3) 図・表の引用にあたっては、著作権者の許可が必要な場合があるので注意する。

4.7.4 氏名・機関名への言及

- (1) 本文中で氏名に言及するときは、ファースト・ネーム、ミドル・ネームのイニシャルも記し、2度目以後は姓のみを記す。ただし、引用文献の表記は前出（4.7.1, p. 56）の方法による。
- (2) 氏名には、謝辞の場合を除き、敬称や肩書きを付けない。
- (3) 本文中で言及した氏名に所属機関名を書き添える必要があるときは、初出の際に氏名のあとに括弧に入れて示す。
- (4) 本文中で研究機関名に言及するときは、初出の際は略さず正式名称を明記する。2度目以後は省略表記してもよい。

4.8 表 (Table) (見本 4.2, p. 59)

4.8.1 表の原稿

- (1) 表の用紙

表は1ページに1つの表を書き、引用文献（「本文中」の脚注）のあとに図とは分けて、Table 1 から順におく。

- (2) 表の大きさ

表の1行の文字数（横）は、40文字（半角の数字、アルファベット、または余白）以内であれば、掲載時半ページ幅となる。80文字以内であれば、全幅とする。なお、表の行数（縦）は、表の題、表の注、余白も含め49行が1ページに相当する。

4.8.2 表作成上の一般的注意

- (1) 表の作成にあたっては、研究結果を最も効果的に伝えることができるように工夫する。表と図の内容の重複を避けると同時に、必要な情報は漏れなく記載されていなければならない。本誌に掲載している見本は一例であり、以下の文献にさまざまな種類の見本が掲載されている。

American Psychological Association. (2020). *Publication manual of the American Psychological Association* (7th ed.). American Psychological Association. pp. 210–224.

- (2) 原則、表の見出しと表の左の項目（スタブ列）は左そろえとし、数値は中央そろえとする。表中の主要な英単語の頭文字は大文字にする。
- (3) 数値は、有効数字を考慮して表記する。また、数字は小数点の位置、小数点以下の桁数をそろえるのが望ましい。
- (4) 数値の単位は、数字が縦に並ぶときはその数値に関する見出しの下、横に並ぶときは項目の右に書き入れる。
- (5) 表中の数字が理論的に必ず1以下の場合（たとえば、相関係数）は、0を付けずに .52

見本 4.2 Table 見本

Table 3

Means and Standard Deviations of Younger and Older Adults in Privacy Consciousness Scale Scores

	Younger adults		Older adults		<i>t</i> -test statistics and effect size		
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>t</i>	<i>df</i>	Cohen's <i>d</i>
Consciousness and Behaviors Regarding Privacy of the Self	3.30	0.69	3.43	0.79	1.49	287.81	0.17
Consciousness Regarding Privacy of Others	2.95	0.82	2.43	0.88	5.42***	309	0.62
Behaviors Regarding Privacy of Others	3.19	0.84	3.81	0.74	6.86***	309	0.78

*** $p < .001$.(Tabata, N., Sato, H., & Ninomiya, K. (2021). Comparison of Privacy Consciousness Between Younger and Older Adults. *Japanese Psychological Research*, 63(2), 108, Table 3. <https://doi.org/10.1111/jpr.12284> より一部変更)

のように小数点以下のみを書く。

- (6) 因子の構造を強調する数値は、ボールド体を用いることができる。
- (7) 表中の線はできるだけ少なくし、適当にスペースをとる。縦の罫線、斜線は用いない。
- (8) 表について本文で言及し、挿入希望位置を本文の中に指定する。

4.8.3 表の番号、表の題

- (1) 表の番号は、論文中に示す順序に従って Table 1, Table 2 のように算用数字で通し番号を付ける。改行して表の題をイタリック体で付け、末尾にはピリオド (.) を付けず、表の上部に左そろえて表記する。
- (2) 表の題は、できるだけ簡潔にする。また表の題に用いる用語は本文と一致させる。

4.8.4 表の注

表の注は、表の題の下ではなく、表の下に以下の順におき、注の符号のあとに簡潔に記す。説明文の終わりには、ピリオド (.) をつける。

- (1) 表全体に関する補足的説明は、表中に注の符号は付けず、“Note.” を表の下におき、説明文を添える。
- (2) 表中の特定部分に関する注は、表中の該当箇所の右肩に上付きで注の符号 (^{a, b, c...}) を付け、複数ある場合は、原則改行せず続ける。
- (3) “*” や “**” などの符号は、5 %, 1 % の統計上の有意水準を示すときに用い、数値の右肩に示し、表の下部にその旨を示す。複数ある場合は改行せずに続ける。

4.9 図 (Figure) (見本 4.3, 4.4, p. 61)

4.9.1 図の原稿

図は多くの情報を直感的に理解しやすい形で示すことができるが、かなりのスペースを要するため、厳選し、必要な図のみを、効果的に使用することが望まれる。他の図や表の内容と重複しないよう注意する。

- (1) 図の用紙

表と同じく、1 ページに1つの図を描き、引用文献（「本文中」の脚注）のあとに表とは分けて、Figure 1 から順におく。

(2) 図の種類

図にはグラフ、画像、チャートなどがある。必要に応じて折れ線グラフ、棒グラフ、散布図など適切な形式を選択する。折れ線グラフは、連続的に変化する独立変数（横軸）に対応する従属変数（縦軸）の変化を示すなどの場合に利用されるのが原則である。棒グラフは、一般に独立変数が名義尺度（カテゴリー群）である場合などに利用される。散布図は、変数間の関係を示すためなどに利用される。

4.9.2 図作成上の一般的注意

(1) 作図

作図は、縮尺を考慮して線の太さを決め、コントラストに留意する。なお、図の作成にあたっては色を使用しない。図作成ソフトを使用して作図する場合、大外の枠、背景色の存在、不要な線の存在など、“Japanese Psychological Research” の図の作成上の注意と異なる点が多いため、注意を要する。

(2) 図の言語

日本語表記を添える必要があるときは、括弧内に日本語を併記する。

(3) 線と点

- i) 縦軸の途中を省略する場合は、軸に波形、または斜線を入れて切り取ったことを示すとよい。
- ii) 座標軸や曲線、折れ線の太さは、論文を通じて一定にする。座標軸の太さはその図中の一番太い曲線、折れ線と同程度にする。
- iii) 同一論文中に比較対照すべき複数の図があるときは、全部に同じ目盛りを用いる。
- iv) 折れ線のシンボルは縮小すると判別しにくくなることがあるので、大きめに描く。
- v) データの散布度を示すためにエラーバーを用いる場合には、それが標準偏差、標準誤差、信頼区間などのどれを表すのかを明記する。

(4) 図中の文字

- i) 図中の文字は縮尺を考慮して大きさと太さを決める。図中の単語の頭文字は大文字とする。ただし、単位は SI（付録 1, pp. 70-74）に従い、大文字か小文字かを決める。
- ii) 座標軸の説明とその単位は各軸の外側中央に示す。縦軸は下から上に向かって横書きで書く。

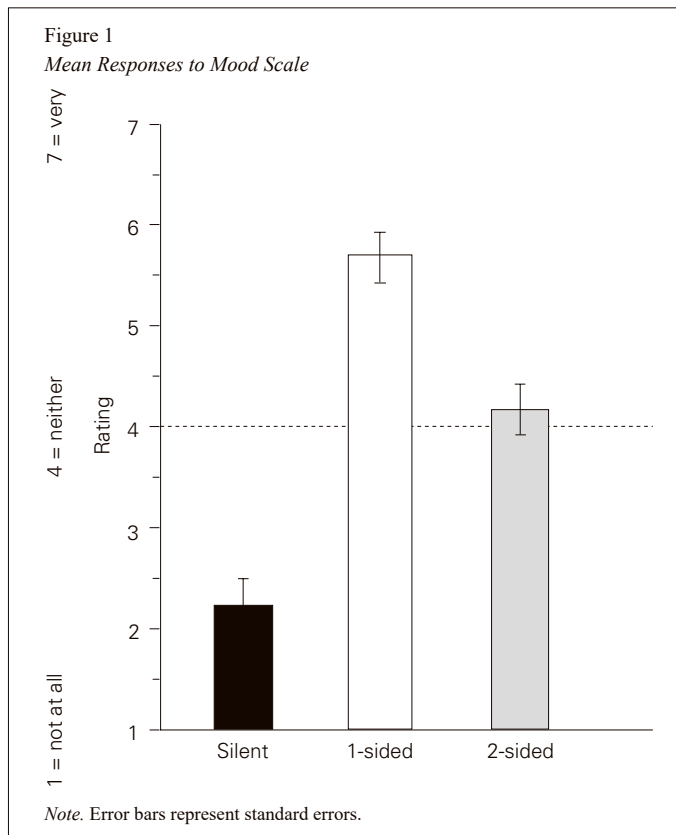
(5) 図について本文で言及し、挿入希望位置を本文の中に指定する。

(6) パス解析や構造方程式モデル（SEM）の結果をパス図で表示する場合には、標準的な表記を行う。以下の文献を参照されたい。

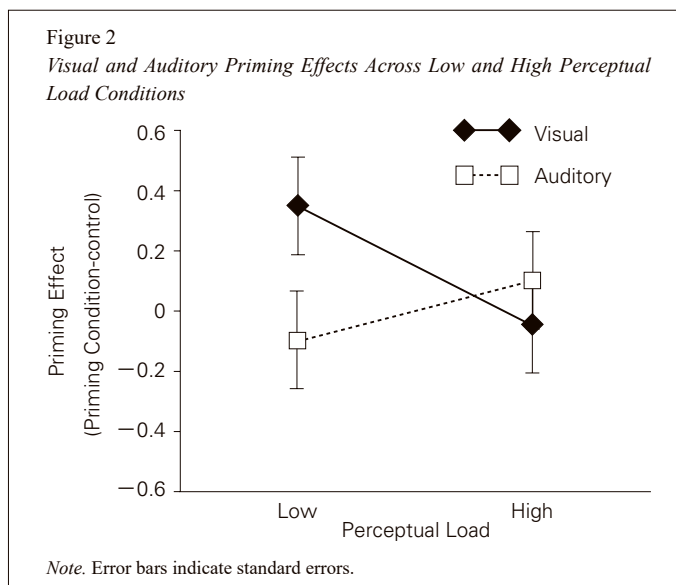
American Psychological Association. (2020). *Publication manual of the American Psychological Association* (7th ed.). American Psychological Association. p. 239, Figure 7.7, p. 240, Figure 7.8, 7.9.

(7) 写真は図とみなして扱う。写真の番号は図の通し番号に含める。

見本 4.3 Figure 見本



見本 4.4 Figure 見本



4.9.3 図の番号, 図の題

- (1) 図の番号は, 論文中に示す順序に従って Figure 1, Figure 2 のように算用数字で通し番号を付ける。
- (2) 図の上に, 図の番号および図の題を左そろえて記す。
- (3) 図の題では, 図の内容を簡潔に説明する。また図の題に用いる用語は本文と一致させる。

4.9.4 図の注

図の注は, 図の下に以下の順におき, 注の符号のあとに簡潔に記す。説明文の終わりに
はピリオド (.) を付ける。

- (1) 図全体に関する補足的説明は, 図中に注の符号は付けず, “Note.” を図の下におき説明文を添える。
- (2) 図中の特定部分に関する注は, 図中の該当箇所の右肩に上付きで注の符号 (^{a, b, c...}) を付ける。図全体に関する注がある場合は, その下に改行して記す。複数ある場合は改行せずに続ける。
- (3) “*”, “**” や “†” などの符号は, 5 %, 1 %, 10 % の統計上の有意水準を示すときに用い, 数値の右肩に示し, 図の下部にその旨を示す。図全体に関する注, 図中の特定部分に関する注がある場合は, その下に改行して記す。複数ある場合は改行せずに続ける。

4.10 引用文献 (見本 4.5, p. 64)

引用文献は本文の次に一括して示す。見出しは “References” とし, 中央大見出しとする。読者が検索, 参照できるように留意する。DOI (Digital Object Identifier) が付与されている文献については, 記載する。なお, 原稿作成時には改ページをして始める。

〈作図の際の留意事項〉

1. 必要不可欠なものを厳選する。
2. 他の表や図と内容が重複しないように注意する。
3. 必要十分な内容が記載されている必要がある。代表値に対する散布度, 標本数などが重要な意味を持つ場合には, それらを図示する工夫が必要である。
4. 類似した内容の図の形式は, 原則として統一する。
5. 図の題は, 簡潔でかつその内容を十分に表し得るものであることが望まれる。同時にまた, 他の図と異なる内容であることが容易に理解できるものでなければならない。
6. 図中の数値, その他の記号の意味は, 本文を読まなくても理解できるように図中で説明されている必要がある。
7. 背景色は白にする。折れ線グラフのシンボルや棒グラフの塗りつぶしは明瞭に識別できるものを用いる。無意味な装飾 (3D 化, 影など) を使用しない。

4.10.1 文献を引用する場合の一般的注意

- (1) 表記が2行以上にわたる場合は、2行目以降を半角4文字程度（10 mm 程度）字下げする。
- (2) 著者の姓のアルファベット順とし、文献番号は付けない。
- (3) 刊行年
 - i) 文献の刊行年は、すべて刊行された西暦年を用いる。
 - ii) 刊行年には（ ），を付ける。
 - iii) 複数年にわたり1巻を逐次刊行される場合は、（2011-2013）. のように2つの年を2分ダッシュ（-）で結んで示す。
 - iv) 「心理学研究」のように1年1巻ではあるが、4月から翌年3月までの年度による場合には、掲載号の刊行年による。
- (4) 文献の表題は、原則として表題と副題の最初の語の頭文字、固有名詞、ドイツ語の名詞は大文字とするが主要語の頭文字も大文字にしてもよい。副題はコロン（:）のあとに続ける。
- (5) 原則として、孫引きや2次的資料を利用した引用は控える。

4.10.2 文献の表記の仕方

- (1) 著者名
 - i) 一般的書き方

著者名は、姓を先に書き、カンマ（,）をおき、ファースト・ネーム、ミドル・ネームのイニシャルの順で書く。イニシャルのあとにはピリオド（.）を付ける。もし同姓で、イニシャルも同じ著者があるときは、名も略さずに書く。著者名の表記法は、原著者のそれに従う。

Takahashi, N. (2013)., Takahashi, Noboru (2013)., Takahashi, Nobuyuki (2013).
 - ii) 共著（著者が20名以下）

すべての著者を書き、最後の著者の前にカンマ（,）と&をおく。andと綴らない。

Inoue, K., Oe, T., & Kawakami, N. (2016).
 - iii) 共著（著者が21名以上）

著者が21名以上の場合、第1から第19著者まで書き、途中の著者は“...”で省略表記し、最後の著者を書く。
- (2) 書籍

書籍の場合は、著者名、刊行年、書籍名、初版以外は版数、出版社を書く。書籍名はイタリック体とする。版（edition）はed.と省略表記する。

 - i) 一般的な例

Author, A. (Year). *Title of Book*. Publisher.

Clement, E. (2002). *Cognitive Flexibility: The Cornerstone of Learning*. Wiley.
 - ii) 編集書

編集者（editor）はEd.と省略表記し、編集者が複数のときはEds.と省略表記する。

見本 4.5 References

References

- Asano, M., Imai M., Kita, S., Kitajo, K., Okada, H., & Thierry, G. (2015). Sound symbolism scaffolds language development in preverbal infants. *Cortex*, 63, 196–205. <https://doi.org/10.1016/j.cortex.2014.08.025>
- Ayyash-Abdo, H., Nohra, J., Ookawa, S., & Sasagawa, S. (2012). Depressive symptoms among adolescents in Lebanon: A confirmatory factor analytic study of the Center for Epidemiological Studies Depression for Children. *Acta Psychopathologica*, 2, 46. <https://doi.org/10.4172/2469-6676.100072>
- Bartram, D., & Lindley, P. A. (2000). *Psychological Testing: BPS Level A Open Learning Programme*. Wiley.
- de Saussure, F. (1966). *Course in general linguistics* (R. Harris, Trans.). McGraw Hill. (Original work published 1916)
- Holtgraves, T. (2020). “Let’s Stay Safe; Please Keep Your Distance”: How to Politely Ask Other People to Maintain Social Distance. Retrieved May 24, 2021 from <https://www.spsp.org/news-center/blog/holtgraves-social-distance-communication>
- Iwasa, K., Tanaka, T., & Yamada, Y. (2018). Factor structure, reliability, and validity of the Japanese version of the Disgust Scale-Revised (DS-R-J). *Japanese Journal of Psychology*, 89(1), 82–92. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.89.16230> (In Japanese with English abstract.)
- Oe, T. (2019). *Manipulated booth temperature and outside air temperature both predict explicit social warmth after food deprivation* [Poster presentation]. The 20th annual meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Portland, OR.
- Shimono, Y., Hasegawa, A., Tsuchihara, K., Tanaka, K., Matsuda, Y., & Kuni-sato, Y. (in press). Longitudinal association between autistic traits and affinity for hikikomori in Japanese university students. *Current Psychology*.
- Suzuki, A., Hoshino, T., Shigemasu, K., & Kawamura, M. (2007). Aging effects on facial expression recognition: Testing for their negative-emotion selectivity. In E. I. Clausen (Ed.), *Psychology of anger* (pp. 177–201). Nova Science.
- Wang, K., Goldenberg, A., Dorison, C. A., Miller, J. K., Uusberg, A., Lerner, J. S., Gross, J. J., Agesin, B. B., Bernardo, M., Campos, O., Eudave, L., Grzech, K., Ozery, D. H., Jackson, E. A., Garcia, E. O. L., Drexler, S. M., Jurković, A. P., Rana, K., Wilson, J. P., ... Moshontz, H. (2021). A multi-country test of brief reappraisal interventions on emotions during the COVID-19 pandemic. *Nature Human Behaviour*, 5, 1089–1110. <https://doi.org/10.1038/s41562-021-01173-x>

Editor, A., Editor, B., & Editor, C. (Eds.). (Year). *Title of Book*. Publisher.

Shwalb, D. W., Nakazawa, J., & Shwalb, B. J. (Eds.). (2005). *Applied developmental psychology: Theory, practice, and research from Japan* (Advances in applied developmental psychology series). Information Age Publishing.

iii) 編集書中の特定章

Author, A., & Author, B. (Year). Title of Chapter. In A. Editor & B. Editor (Eds.), *Title of Book* (pp. xx-xx.). Publisher.

Author, A. (Year). Title of Chapter. In A. Editor (Ed.), *Title of Book* (xx ed., Vol. xx, pp. xx-xx.). Publisher.

Itakura, S., Moriguchi, Y., & Morita, T. (2013). The Development of Mentalizing and Emotion in Human Children. In S. Watanabe & S. A. Kuczaj (Eds.), *Emotions of Animals and Humans: Comparative Perspectives* (pp. 207-222). Springer Japan.

iv) 数巻にわたる書籍

Author, A. (Year). *Title of Book* (Vols. xx-xx). Publisher.

Christie, D. J. (Series Ed.). (2008-2022). *Peace Psychology Book Series* (Vols. 1-37). Basic Books.

v) 数巻にわたる書籍の特定の1巻

Author, A. (Year). *Title of Book* (B. Editor, Series Ed.). Title of Series. Publisher.

Liben, L. S., & Mueller, U. (Eds.). (2015). *Cognitive processes* (R. M. Lerner, Series Ed.). Handbook of child psychology and developmental science. Vol. 2. Wiley.

vi) 翻訳書

Author, A (Year). *Title of book* (B. Translator, Trans.). Publisher. (Original work published Year.)

Oguma, E. (2002). *A genealogy of “Japanese” self-images* (D. Askew, Trans.). Trans Pacific Press. (Original work published 1996)

(3) 逐次刊行物（学術誌を含む雑誌，年報，紀要など）

逐次刊行物の場合は，著者名，刊行年，表題，誌名，巻数，ページを書く。誌名，巻数をイタリック体，引用文献の最初と最後のページを2分ダッシュ（-）で結んで示す。誌名の主要語の頭文字は大文字とする。DOIが付与されている場合は記載する。

巻を通してページが振られていない場合は，号数は必ず記載する。ただし，巻を通してページが振られている場合であっても，号数を記載してもかまわない。また誌名は，原則として正式名称を，省略せず記載する。

i) 雑誌

Author, A., Author, B., & Author, C. (Year). Title of article. *Journal Title*, Vol. (No.), xx-xx. <https://doi.org/xxx>

Ishikawa, S., Chen, J., Fujisawa, D., & Tanaka, T. (2019). The development, progress, and current status of cognitive behaviour therapy in Japan. *Australian Psychologist*, 55(6), 598-

605. <https://doi.org/10.1111/ap.12450>

ii) 年報・年鑑、紀要

紀要、報告書の名称が同一で、いくつかの部門、シリーズに分かれているものには、表題の直後に続けて、その部門やシリーズの名称を記す。なお、紀要、報告等の名称に、その大学などの名称が含まれていない場合は括弧に入れて記す。

Author, A. (Year). Title of article. *Journal Title*, Vol. (No.), xx-xx. <https://doi.org/xxx>

Saito, A., & Nozaki, M. (2018). Childrearing and Social Support in Fathers of 3-5 Years Old Children. *The Bulletin of Musashino University, Faculty of Education*, 4, 9-17. <http://id.nii.ac.jp/1419/00000713/> (In Japanese.)

(4) オンライン資料の引用

i) 刊行された冊子体がある場合には、冊子体を引用文献として記載する。

ii) 刊行されることが確定し、刊行までの間、オンラインで早期公開 (Early View) されている場合、刊行年の表記は (公開年) とし、早期公開である旨と DOI を明記する。刊行されたあとは、冊子体の表記に差し替える。

Author, A. (Year). Title of article. *Journal Title*. Advance online publication. <https://doi.org/xxx>

Toyama, N. (2019). Developmental changes in infants' object interactions across the transitional period from crawling to walking. *European Journal of Developmental Psychology*. Advance online publication. <https://doi.org/10.1080/17405629.2020.1814730>

iii) プレプリントされている文献の場合、アップロードサイト名と DOI を明記する。

Author, A. (Year). Title of article. Upload site. <https://doi.org/xxx>

Yoshimura, N., Morimoto, K., Murai, M., Kihara, Y., Marmolejo-Ramos, F., Kubik, V., & Yamada, Y. (2020). Age of smile: A cross-cultural replication report of Ganel and Goodale (2018). PsyArXiv. <https://doi.org/10.31234/osf.io/dtx6j>

iv) オンライン上でのみ閲覧できる資料で、DOI がある場合は、DOI を記載する。

Author, A. (Year). Title of article. *Journal Title*, Vol. (No.), Article No. <https://doi.org/xxx>

Miura, A., & Kobayashi, T. (2016). Survey Satisficing Inflates Stereotypical Responses in Online Experiment: The Case of Immigration Study. *Frontiers in Psychology*, 7, 1563. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2016.01563>

v) オンライン上でのみ閲覧できる資料で、DOI がない場合は、次の書式で記載する。

Author, A. (Year). Title of article. Web site. Retrieved Date of access, from URL

American Psychological Association. (2014). APA databases: PsycINFO. American Psychological Association. Retrieved October 29, 2014 from <http://www.apa.org/pubs/databases/psycinfo/index.aspx>

ただし、オンライン上から削除される可能性もあるため、編集委員会からの請求があった場合に備え、速やかに対応できるようにしておく必要がある。

(5) その他

i) 学位論文など

学位論文などの年次は年度によらず、修了、授与の年をもって示す。また抄録などが公刊されている場合は、それによる。

Author, A. (Year). *Title of article* (Unpublished master's thesis, doctoral dissertation). University.

Kitazaki, M. (1997). *Mobile observer's visual perception: Application of the generic-view principle to three-dimensional motion perception* (Unpublished doctoral dissertation). University of Tokyo.

ii) 学会などでの発表

Author, A. (Year). *Title of article*. Conference Name, Location, xx-xx.

Nishiyama, H., & Notomi, K. (2020). *Implementing UDL to Improve Lessons in Primary and Secondary School in Japan*. [Poster presentation]. The 34th Annual Pacific Rim International Conference on Disabilities and Diversities, Honolulu, HA.

iii) 印刷中の論文

刊行されることが確定してはいるが未刊行の場合、刊行年の代わりに“(in press)”と明記する。

Author, A., & Author, B. (in press). *Title of article*. *Journal title*.

Boiger, M., Kirchner-Häusler, A., Schouten, A., Uchida, Y., & Mesquita, B. (in press). Differences in Bumps in the Road: The Emotional Dynamics of Couple Disagreements in Belgium and Japan. *Emotion*.

iv) 新聞記事および雑誌記事の引用

Author, A. (Year). *Title of article*. *Newspaper/Journal name*, Date, pp.xx-xx.

Frاندale, N. (2002). Living on his nerves. *Sunday Telegraph Magazine*, March 17, pp. 12-19.

4.10.3 日本語文献の表記の仕方

- (1) 表記法は、外国語文献の書き方に準ずる。著者名のローマ字表記は原著者のそれに従う。
- (2) 文献名は、原著者による英訳の付いているときは、それを用いる。これのないときには、可能であれば、原著者に確認し記載する。確認が取れない場合には、適宜英訳したものを記載し“(In Japanese, translated by the author of this article.)”と末尾に付記する。
- (3) 日本語の文献は、“(In Japanese.)”と付記し、日本語の文献であることを明示する。また英文アブストラクトの付いているものには、“(In Japanese with English abstract.)”と明示する。

Sato, A. (2014). The future is in your right hand: An embodied temporal concept. *Japanese Journal of Psychology*, 85(4), 345-353. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.85.13055> (In Japanese with English abstract.)

- (4) 書籍の場合、出版社名は、出版社による英語表記に従う。
- (5) 雑誌名は、刊行元による英語表記に従う。英語表記のない場合には、日本名をローマ字

(ヘボン式) に直して記載する。

4.10.4 引用文献の記載順序

- (1) 引用文献は、日本語文献と外国語文献を分けず、共著の場合も、第1著者の姓のアルファベット順に配列することを原則とする。
- (2) 同一著者が、単独で発表している文献と、その著者が第1著者として名を連ねている共著の文献がある場合には、単著を先にし、次に共著を並べる。また、第1著者が同一で、第2著者が異なるときは、刊行年ではなく、第2著者の姓のアルファベット順にそれらを並べる。第3著者以降も同様である。

Toyama, K. (2019).

Toyama, K., Nagai, S., & Nakamichi, K. (2015).

Toyama, K., & Oe, T. (2011).

- (3) 同一著者の、あるいは同一配列の共著の文献がいくつかある場合には、早い刊行年のものから順に並べる。同一年に刊行された文献がいくつかある、あるいは、本文への引用の際の省略表記が同一となる場合、刊行年のあとに、文献名のアルファベット順で、アルファベット小文字 a, b... を付して区別する。

Nishiyama, H. (2019a).

Nishiyama, H. (2019b).

4.11 アブストラクトとキーワード

4.11.1 アブストラクト

100—175 語の英文アブストラクトを添付する。アブストラクトには問題（目的）、方法、結果、考察または結論を含める。

4.11.2 キーワード

アブストラクトの下にその論文の分類、検索などのための、その論文を特徴づける英語のキーワードを3—5項目つける。検索の便のため、次の基準に従う。

- (1) キーワードは名詞または名詞句であり、複数形をとり得るもの（countable noun）は複数形で示す。

（例）theory — theories, mouse — mice, child — children

- (2) 原則として略語は使わない。

- (3) アブストラクトまたは本文中と異なった語を用いてもよい。

（例）hyperactivity — hyperkinesis, quantification — measurement

- (4) 固有名詞（氏名、地名、テスト名など）もキーワードになり得る。なお固有名詞などのように大文字を使う必然性がある場合以外はすべて小文字で書く。

（例）Freud (Sigmund), Wechsler Adult Intelligence Scale

「キーワードの設定はその後の引用に影響する」については、p. 48 参照のこと。

4.12 Supporting Information

論文の補足資料として、Wiley Online Library の Supporting Information 機能を利用することができる。詳細は学会ホームページを参照されたい。

付 録

付録 1 単位記号

1 基本単位と補助単位

Table 1
基本単位

量	単位の名称	記号
長 さ	メートル	m
質 量	キログラム	kg
時 間	秒	s
電 流	アンペア	A
熱力学温度	ケルビン	K
物 質 量	モル	mol
光 度	カンデラ	cd

補助単位

量	単位の名称	記号
平 面 角	ラジアン	rad
立 体 角	ステラジアン	sr

2 組立単位

Table 2
固有の名称をもつ組立単位（一部）

量	SI 単位		
	名称	記号	定義
周 波 数	ヘルツ	Hz	s^{-1}
力	ニュートン	N	$kg \cdot m/s^2$
圧 力, 応 力	パスカル	Pa	N/m^2
エネルギー, 仕事, 熱量	ジュール	J	$N \cdot m$
仕事率, 工率, 動力, 電力	ワット	W	J/s
電 圧, 電 位	ボルト	V	W/A
静 電 容 量	ファラド	F	C/V
電 気 抵 抗	オーム	Ω	V/A
コンダクタンス	ジーメンズ	S	A/V
インダクタンス	ヘンリー	H	Wb/A
光 束	ルーメン	lm	$cd \cdot sr$
照 度	ルクス	lx	lm/m^2

3 心理学に関係ある SI 単位と併用単位

Table 3
空間および時間

量	単位の名称	記号	備 考
平 面 角	ラジアン	rad	1° (度), 1' (分), 1" (秒) は併用できる
立 体 角	ステラジアン	sr	
長 さ	メートル	m	
面 積	平方メートル	m ²	
体積, 容量	立方メートル	m ³	1 L (リットル) は併用できる
時 間	秒	s	1 min (分), 1 h (時), 1 d (日) は併用できる
角 速 度	ラジアン毎秒	rad/s	
速度, 速さ	メートル毎秒	m/s	
加 速 度	メートル毎秒毎秒	m/s ²	

Table 4
周期現象および関連現象

量	単位の名称	記号	備 考
周波数, 振動数	ヘルツ	Hz	1 Hz = 1 s ⁻¹
回転速度, 回転数	回毎秒	s ⁻¹	min ⁻¹ は併用できる

Table 5
力学

量	単位の名称	記号	備 考
質 量	キログラム	kg	1 t (トン) は併用できる
力	ニュートン	N	1 N = 1 kg · m/s ²
圧 力	パスカル	Pa	1 Pa = 1 N/m ² 1 bar (バール) は併用できる
仕事, エネルギー	ジュール	J	1 eV (電子ボルト) は併用できる
仕事率, 工率, 動力	ワット	W	1 W = 1 J/s

Table 6
熱

量	単位の名称	記号	備 考
熱力学温度	ケルビン	K	°はつけない
セルシウス温度	セルシウス度	℃	これも SI 単位
温度間隔, 温度差	ケルビン	K	セルシウス温度の温度間隔ない し温度差は℃でもよい
熱・熱量	ジュール	J	カロリーは不可

Table 7
電気および磁気

量	単位の名称	記号	備 考
電 流	アンペア	A	
電荷, 電気量	クーロン	C	$1\text{ C} = 1\text{ A}\cdot\text{s}$
電位, 電位差, 電圧, 起電力	ボルト	V	$1\text{ V} = 1\text{ W/A}$
静電容量, キャパシタンス	ファラド	F	$1\text{ F} = 1\text{ C/V}$
自己インダクタンス, 相互インダクタンス	ヘンリー	H	$1\text{ H} = 1\text{ V}\cdot\text{s/A}$
磁束密度, 磁気誘導	テスラ	T	$1\text{ T} = 1\text{ V}\cdot\text{s/m}^2$
(電気) 抵抗 (直流)	オーム	Ω	$1\ \Omega = 1\text{ V/A}$
(電気の) コンダクタンス (直流)	ジーメン	S	$1\text{ S} = 1\text{ A/V} = 1\ \Omega^{-1}$

Table 8
光および関連する電磁放射

量	単位の名称	記号	備 考
波 長	メートル	m	$\text{\AA}$ は併用してもよい
放射エネルギー	ジュール	J	
放 射 束	ワット	W	
放 射 強 度	ワット毎ステラジアン	W/sr	
放 射 輝 度	ワット毎ステラジアン毎 平方メートル	W/ ($\text{sr}\cdot\text{m}^2$)	
放射発散度	ワット毎平方メートル	W/m ²	
放 射 照 度	ワット毎平方メートル	W/m ²	
光 度	カンデラ	cd	
光 束	ルーメン	lm	$1\text{ lm} = 1\text{ cd}\cdot\text{sr}$
光 量	ルーメン秒	lm $\cdot$ s	
輝 度	カンデラ毎平方メートル	cd/m ²	
光束発散度	ルーメン毎平方メートル	lm/m ²	
照 度	ルクス	lx	$1\text{ lx} = 1\text{ lm/m}^2$

Table 9

音

量	単位の名称	記号	備 考
周 期	秒	s	
周波数, 振動数	ヘルツ	Hz	
波 長	メートル	m	
密 度	キログラム毎立方メートル	kg/m ³	
静圧 (瞬時) 音圧	パスカル	Pa	1 bar (バール) は併用できる
音の速さ, 音速	メートル毎秒	m/s	
音響エネルギー束, 音響パワー	ワット	W	
音の強さ	ワット毎平方メートル	W/m ²	
音響インピーダンス	パスカル秒毎立方メートル	Pa・s/m ³	

Table 10

物理化学および分子物理学

量	単位の名称	記号
物 質 量	モル	mol
モ ル 濃 度	モル毎立方メートル	mol/m ³

4 単位につける接頭語

Table 11

基本単位

名称	記号	大きさ
ギガ (giga)	G	10 ⁹
メガ (mega)	M	10 ⁶
キロ (kilo)	k	10 ³
ヘクト (hecto)	h	10 ²
デカ (deca)	da	10
デシ (deci)	d	10 ⁻¹
センチ (centi)	c	10 ⁻²
ミリ (milli)	m	10 ⁻³
マイクロ (micro)	μ	10 ⁻⁶
ナノ (nano)	n	10 ⁻⁹

5 不適切な単位の使用例とその正しい表し方

Table 12

単位の正しい表し方

SI に適しない単位の例	SI に適した単位の例
μ (ミクロン)	μm (マイクロメートル)
$\text{m}\mu$ (ミリミクロン)	nm (ナノメートル)
sec (秒)	s
c/s, cps	Hz (ヘルツ)
nt (ニト)	cd/m^2
1 mL (ミリランベルト)	$3.183 \text{ cd}/\text{m}^2$
1 sb (スチルブ)	$10 \text{ kcd}/\text{m}^2$
$^{\circ}\text{K}$ (ケルビン)	K
1 cal (カロリー)	4.18605 J (ジュール)
1 erg (エルグ)	$0.1 \mu\text{J}$ (マイクロジュール)
1 dyn (ダイン)	$10 \mu\text{N}$ (マイクロニュートン)
1 Gs (ガウス)	0.1 mT (ミリテスラ)
rpm (1 分あたりの回転数)	min^{-1}

付録2 「心理学研究」投稿のためのチェックリスト

下にあげたチェックリストは、原稿を書く時によく見落とされる事柄である。著者は、これらの点を確認した上で、原稿を編集部へ提出していただきたい。ページは「執筆・投稿の手びき」中の該当する箇所のページを表す。

論文情報

- (1) 論文の種類は適切か。論文の長さは、種類ごとの規定ページ数におさまっているか。 ____ p.22
- (2) 表題のつけ方（副題は2倍ダッシュで囲む）と文字数（40文字程度）は適切か。 ____ p.24
- (3) 共著の場合、全員の著者名、所属機関名（日本語、英語）が、電子投稿システム上に入力されているか。 ____ p.24
- (4) 英文アブストラクトの長さは適切か（100—175語）。ネイティブの専門家の英文校閲を受けたか。キーワードは適切に設定されているか（3—5項目）。 ____ pp.22-23, p.47

原稿の書き方

- (1) 1ページの文字数と行数（25文字×32行、10.5ポイント以上）、上下左右の余白（3cm以上）の取り方は適切か。 ____ p.14, p.22
- (2) 原稿PDFファイルには、表題（日本語、英語）、英文アブストラクトとキーワード、本文、引用文献、「本文中」の脚注、図（図ごとに図の題と注を含め、改ページ）、表（表ごとに表の題と注を含め、改ページ）の順にすべて適切に書かれているか（著者名、所属機関名、「表題ページ」の脚注など、著者情報は含めない）。 ____ p.14, pp.22-48
- (3) 通しページを付けているか。 ____ p.22

段落と見出し

- (1) 見出しの付け方（3種類のみ）、見出し以外の序列（1., (a)）は適切か。 ____ p.25
- (2) 段落の区切り方は適切か。 ____ p.25

略語

- (1) 不適切な略語や不必要な説明はないか。 ____ p.27
- (2) 略語に説明が付いているか。 ____ p.27

測定の単位

- (1) 測定の単位とその略号は、国際単位系（SI）にしたがっているか。 ____ pp.29-30

引用文献

- (1) 引用文献の記述は正しいか。また、本文中の引用と綴りや年が合致しているか。 ____ pp.30-32, pp.38-47

脚注

- (1) 「表題ページ」の脚注には、（英文連絡先）、研究助成、大会発表、謝辞、著者の改姓（名）、所属機関の異動などが正しく、システム上にのみ入力されているか。 ____ pp.24-25
- (2) 「本文中」の脚注は、必要最小限か。「表題ページ」の脚注から続く通し番号が付けられているか。 ____ p.26

図表

- (1) それぞれの図表には、番号、題、必要に応じて注が付いているか。 ____ p.33, p.37
- (2) すべての図表が、本文中の中で引用されているか。図表の番号は本文中で言及される順序どおりか。本文中に挿入位置が示されているか。 ____ pp.32-38
- (3) 表の罫線は最小限になっているか。 ____ p.34
- (4) 図の大きさは適切か。図の各部分は縮小印刷されても判別できるか。 ____ p.35

著作権と引用

- (1) 既刊の論文・図表を引用する場合に、必要に応じて書面による許可をもとめたか。 ____ p.32
- (2) 引用には、すべて出典と掲載ページが入っているか。 ____ pp.30-32
- (3) この論文は未公開であり、二重投稿や剽窃にあたらないか。 ____ pp.12-14

投稿の仕方

- (1) 電子投稿システムの著者マニュアルを確認したか。 ____ p.14
- (2) 倫理チェックリストにすべて回答したか。 ____ p.77-78

付録3 “Japanese Psychological Research” 投稿のためのチェックリスト

下にあげたチェックリストは、原稿を書く時によく見落とされる事柄である。著者は、これらの点を確認した上で、原稿を編集部へ提出していただきたい。ページは「執筆・投稿の手びき」中の該当する箇所のページを表す。

論文情報

- (1) 論文の種類は適切か。論文の長さは、種類ごとの規定単語数におさまっているか。_____ p.49
- (2) 表題のつけ方（副題にはコロンを付ける）と文字数（12—15 語程度）は適切か。_____ pp.50—51
- (3) 共著の場合、全員の著者名、所属機関名が電子投稿システム上に入力されているか。_____ p.51
- (4) アブストラクトの長さは適切か（100—175 語）。キーワードは適切に設定されているか（3—5 項目）。_____ p.68

原稿の書き方

- (1) 本文は英語とし、用紙の大きさ（A4 判）、文字設定と 1 ページの行数（一般的フォント、10.5 ポイント以上、ダブルスペース、23 行以内）、上下左右の余白（3 cm 以上）の取り方は適切か。_____ p.14, pp.49—50
- (2) 原稿 PDF ファイルには、表題、アブストラクトとキーワード、本文、引用文献、「本文中」の脚注、図（図ごとに図の題と注を含め、改ページ）、表（表ごとに表の題と注を含め、改ページ）の順にすべて適切に書かれているか（著者名、所属機関名、「表題ページ」の脚注は含めない）。_____ p.14, pp.49—69
- (3) 通しページを付けているか。_____ p.50
- (4) ネイティブの専門家の英文校閲を受けたか。_____ p.50

段落と見出し

- (1) 見出しの付け方（3 種類のみ）、見出し以外の序列（1., (a)）は適切か。_____ p.52
- (2) 段落の区切り方は適切か。_____ p.52

略語

- (1) 不適切な略語や不必要な説明はないか。_____ p.53
- (2) 略語に説明が付いているか。_____ p.53

測定の単位

- (1) 測定の単位とその略号は、国際単位系（SI）にしたがっているか。_____ pp.55—56

引用文献

- (1) 引用文献の記述は正しいか。また、本文中の引用と綴りや年が合致しているか。_____ pp.56—58, pp.62—68

脚注

- (1) 「表題ページ」の脚注には、（英文連絡先）、研究助成、大会発表、謝辞、著者の改姓（名）、所属機関の異動などが正しく、システム上にのみ入力されているか。_____ pp.51—52
- (2) 「本文中」の脚注は、必要最小限か。「表題ページ」の脚注から続く通し番号が付けられているか。_____ pp.52—53

図表

- (1) それぞれの図表には、番号、題、必要に応じて注が付いているか。_____ p.59, p.62
- (2) すべての図表が、本文の中で引用されているか。図表の番号は本文中で言及される順序どおりか。本文に挿入位置が示されているか。_____ pp.57—62
- (3) 表の罫線は最小限になっているか。_____ p.59
- (4) 図の大きさは適切か。図の各部分は縮小印刷されても判別できるか。_____ pp.59—60

著作権と引用

- (1) 既刊の論文・図表を引用する場合に、必要に応じて書面による許可をもとめたか。_____ p.57, p.58
- (2) 引用には、すべて出典と掲載ページが入っているか。_____ pp.56—58
- (3) この論文は未公開であり、二重投稿や剽窃にあたらないか。_____ pp.12—14

投稿の仕方

- (1) 倫理チェックリストにすべて回答したか。_____ pp.77—78

付録４ 倫理チェックリスト（2022年10月現在）

「心理学研究」，“*Japanese Psychological Research*” 投稿論文倫理チェックリスト

昨今は倫理的配慮に対する要請が強まっており、このチェックリストは、投稿された論文が倫理的な要請項目をどの程度満たしているか、編集委員会が把握するために作成された。投稿時に各問いへ回答する。満たされていない項目があるというだけで不採択になることはないが、編集委員会や事務局から詳しい事情を確認する場合がある。

「公益社団法人日本心理学会会員倫理綱領及び行動規範」の趣旨を踏まえ、「公益社団法人日本心理学会倫理規程」に則り、研究の実施や論文作成にあたっては、リストの項目だけでなく、全般的に倫理的配慮が必要である。

1. 研究を行うにあたり、所属または関連機関の倫理委員会の承認を得ましたか。

[はい] [いいえ]

いいえの場合、承認を得なかった理由を書いてください。

いいえの場合、ご自身で実験・調査等の実施が倫理的に問題ないとは判断された理由を、できるだけ詳細に書いてください。

(たとえば、当該研究とは関係のない第3者に、実験・調査等の実施が倫理的に問題ないと事前に確認した。など)

2. 実験や調査に先立ち研究参加者からインフォームド・コンセントを得ましたか。

(インフォームド・コンセントには、実験や調査の内容についての説明や、実験や調査から自由に離脱できる旨が記されているものとします。承諾のサインを得ることが望ましいです。)

[はい] [いいえ]

いいえの場合、その理由を書いてください。

3. やむを得ずインフォームド・コンセントが得られない場合は、代替となる手段をとりましたか。

(親や責任者による承諾を得るなど)

[はい] [いいえ] [該当せず (インフォームド・コンセントを得ている)]

いいえの場合、その理由を書いてください。

4. 実験や調査においては、参加者や動物に負荷やリスクはありませんでしたか。

[あった] [なかった]

負荷やリスクがあった場合は、その内容や、どのような対処・処置を行ったか、具体的に書いてください。

[負荷やリスクの内容]

[対処や処置]

5. 実験や調査にデセプションがありましたか。

[はい] [いいえ]

はいの場合、事後説明などによる対処の有無について書いてください。

6. 動物実験においては、必要最小限の個体数で実験しましたか。

(無駄に多くの個体数を用いませんでしたか。)

[はい] [いいえ] [該当せず (動物実験は実施せず)]

いいえの場合、その理由を書いてください。

7. プライバシーは保障されていますか。

(データ収集や処理、論文に紹介する際の匿名性の保障など)

[はい] [いいえ]

いいえの場合、その理由を書いてください。

8. 論文は著者自身によるオリジナルの論文ですか。

(オリジナルの論文とは他所に投稿中でない、または公刊されていない論文を指します。データの再分析が含まれるなど密接に関連する論文がある場合は、参考資料としてあわせてお送りください。)

[はい] [いいえ]

いいえの場合、その理由を書いてください。

9. 著者が連名である場合、連名者全員から投稿の承諾を得ていますか。

[はい] [いいえ] [該当せず (単著のため)]

いいえの場合、その理由を書いてください。

著者名の順序は貢献度を適切に反映していますか。

[はい] [いいえ] [該当せず (単著のため)]

いいえの場合、その理由を書いてください。

10. 他者が作成した材料やプログラムを用いたり、図表や本文を引用した場合、その出典は示されていますか。

[はい] [いいえ]

いいえの場合、その理由を書いてください。

それらを用いたり、引用した場合に、著作権上の問題が生じないかを自身で確認しましたか。

(※市販質問紙のコピーや翻案を利用した場合、著作権上の問題が生じることがあります。)

[はい] [いいえ]

いいえの場合、その理由を書いてください。

11. 不適切、あるいは差別的な用語や表現がないかチェックしましたか。

[はい] [いいえ]

いいえの場合、その理由を書いてください。

12. 本論文において、利益相反がありますか。

利益相反の定義については、「利益相反 (COI) に関する規則 <https://psych.or.jp/wp-content/uploads/2021/06/JA_JPA_Rules_on-Conflicts_of_Interest.pdf>」を必ず確認してください。適切に対応しない場合は、刊行後であっても論文が取下げ処分となる場合もあります。

(※利益相反がない場合は、利益相反がない旨を、ある場合は、著者情報を含まないよう本文末に記載してください。)

[はい] [いいえ]

利益相反がある場合は、その詳細を書いてください。

あ と が き

近年、実証科学のいずれの領域においても、研究活動のグローバル化が一挙に進んできました。その中には、データ再現性問題や、データ不正行為の出現に端を発するオープンサイエンス化の動き、その背景にある研究倫理の定着や、利益相反に関連する諸問題など、明暗さまじな「研究界の動き」があり、それらに対する考え方や対応方法も、急速にスピードを上げながら変化をしてくれています。

そのような中で、2015年版改訂から7年を経て、「心理学研究」ならびに“*Japanese Psychological Research*”のための「執筆・投稿の手びき」を改訂する運びとなりました。今回の改訂の一番の契機は、American Psychological Association (APA) の *Publication Manual* 第7版が公刊されたことです。その中身は大きく変化しており、これまでにない記述も盛り込まれてきました。同書をベースとしている日本心理学会としても「論文の書き方」の手びき書として改訂は必須のものと考えましたが、同時に、日本心理学会としては、上記のようなさまざまな動きや問題をどう考え、どのようにして研究者集団としての研究実践を行っていくのか、多くの問題を「突きつけられて」の改訂となりました。

日本心理学会は多様な領域の心理学研究者が集う自発的研究者集団であり、これらの問題についても、その成員の間で十分な議論と納得を得たうえで、具体的な制度やルールを変えていくべきだと考えます。しかし同時に、「世界の潮流」の動きが早いだけに、そうした「学会としての意思決定」をどのようにしてスピード感をもって進めていけるのか、拙速であってはならない、しかし常に新しい研究者を迎え、共に育っていく場としての学会にふさわしい「常に変化していくこと」を怖れてはいけない、その両者の拮抗に迷いつつの改訂となりました。

一部の方には「保守的にすぎる」と思われるでしょうし、一部の方には「あまりに急な変化が多すぎる」と思われるかもしれません。ただ、こうしたルールも、まさに「変化し続けるもの」であることを考えれば、ある一時点で一つの「形を取る」こと自体が、次の大きな変化のステップになる、と考えています。ぜひ、今回の「執筆・投稿の手びき」を次の変化への1ステップとして有効に活用していただき、会員相互での議論が活発化されることを強く希望しています。

今改訂から、本学会はこの手びきを印刷し製本することはやめて、電子媒体としてのみの公開とさせていただきます。ただし、教育現場などでは印刷物の形態でほしいというご要望があったため、出力用のPDF版も併せて公開いたします。ご活用ください。

今回の「執筆・投稿の手びき」改訂にあたり、「心理学研究」ならびに“*Japanese Psychological Research*”の編集委員会から委員長の中村 知靖・石井 敬子、副委員長の浅野 倫子・石川 信一のみなさま（敬称略）、日本心理学会事務局の編集担当の井戸 翔太・恩田 麻里菜両氏に文字通りのご尽力をいただきました。記して謝意を表します。ありがとうございました。

2022年5月21日

公益社団法人日本心理学会機関誌等編集委員会委員長 原田悦子

執筆・投稿の手びき 2022 年版

2022 年 10 月 25 日 初版第 1 編集版発行

編 集 公益社団法人 日本心理学会機関誌等編集委員会

発 行 公益社団法人 日本心理学会

〒113-0033 東京都文京区本郷 5 丁目 23-13

田村ビル

Tel 03-3814-3953

Fax 03-3814-3954

E-mail : jpa@psych.or.jp

制 作 株式会社金子書房

© 日本心理学会 2022